

# 下池田遺跡

大阪府教育委員会



# 下 池 田 遺 跡

大阪府教育委員会



a. 調査地遠景（右上に久米田池）



b. 調査地全景（北西から）



a. S D07弥生土器壺、マダコ壺



b. S D06墨書須恵器杯、転用硯

c. S D18石匙、S D07石鎌



d. S K24蓮華文軒丸瓦

## 序　文

下池田遺跡は、岸和田市下池田町にある弥生時代から中世に至る複合遺跡です。現在までの発掘調査で、岸和田市域では最大級の弥生時代中期から後期にかけての集落遺跡であることが判明しています。

大阪府教育委員会では、府営岸和田下池田住宅建て替えに先立ち、平成15年度から平成17年度に発掘調査を実施しました。その結果、弥生時代後期の溝や中世の井戸・溝などの遺構が検出され、弥生時代の木製扉やマダコ壺、奈良時代の墨書き土器、中世の土器や瓦などの遺物が多数出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料になるものと思われます。

本調査の実施にあたっては、地元の方々をはじめ、大阪府住宅まちづくり部、岸和田市教育委員会等々の関係各位に多大なご指導とご協力を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願ひ申し上げます。

平成20年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長　富雄　昌秀

## 例　　言

1. 本書は、大阪府住宅まちづくり部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した府営岸和田下池田住宅建て替えに伴う、岸和田市下池田町所在、下池田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、平成15年度文化財保護課調査第二グループ主査藤澤真依、平成16年度同技師三木弘、平成17年度同主査西口陽一を担当者として実施した。遺物整理は、平成18・19年度に調査管理グループ主査三宅正浩・同技師藤田道子が担当して行った。
3. 本調査の調査番号は、平成15年度が03036、平成16年度が04050、平成17年度が05014・05040である。
4. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 本調査の写真測量は、平成15年度が株式会社日建技術コンサルタント、平成16年度が株式会社ウェスコ、平成17年度が株式会社サンヨーナイスコーポレーションに委託した。撮影フィルムは各社が保管している。
6. 調査で作製した記録資料と出土遺物は大阪府教育委員会で保管している。
7. 本書は西口・藤澤・三木が執筆、編集した。
8. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した経費は、すべて大阪府住宅まちづくり部が負担した。
9. 本報告書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、1,439円である。

## 本文 目 次

序文

例言

目 次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
第3章	調査結果	5
第1節	平成15年度の調査	5
第2節	平成16年度の調査	21
第3節	平成17年度の調査	42
第4章	まとめ	47

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	1
第2図	明治18年仮製地形図による調査地位置図	2
第3図	調査地位置図	3
第4図	調査区位置図	4
第5図	基本土層図・調査区平面模式図	6
第6図	調査区遺構平面図	7
第7図	S K 0 1 埋上断面図	8
第8図	S K 0 1 出土遺物実測図	8
第9図	S E 0 3 平面図・埋土断面図	9
第10図	S E 0 3 出土遺物実測図	10
第11図	S D 0 5 出土遺物実測図（1）	11
第12図	S D 0 5 出土遺物実測図（2）	12
第13図	S D 0 6・0 7・2 9 埋土断面模式図	13
第14図	S D 0 6 出土遺物実測図	13
第15図	S D 0 7 出土遺物実測図	14
第16図	S K 2 4 平面図・埋土断面図	15
第17図	S K 2 4 出土遺物実測図	16

第18図	S D 2 7 埋土断面図	18
第19図	S D 2 7 出土遺物実測図	18
第20図	S X 2 0 、 S D 2 6 他出土遺物実測図	19
第21図	0 0 1 自然河道出土遺物実測図	21
第22図	0 0 1 自然河道平面図・土層図	22
第23図	空測平面図	23
第24図	0 0 2 自然河道出土遺物実測図	24
第25図	0 0 2 自然河道平面図・土層図	26
第26図	0 0 2 自然河道出土木製扉実測図	27
第27図	0 3 0 溝出土遺物実測図	29
第28図	0 3 0 溝平面図・土層図	30
第29図	0 2 8 井戸土層図	31
第30図	0 2 8 井戸平面図・立面図	32
第31図	0 2 8 井戸出土遺物実測図（1）	33
第32図	0 2 8 井戸出土遺物実測図（2）	34
第33図	0 2 8 井戸出土遺物実測図（3）	35
第34図	0 3 6 井戸平面図・土層図	36
第35図	0 1 6 溝平面図・土層図	37
第36図	0 3 4 落込み出土遺物実測図（1）	38
第37図	0 3 4 落込み平面図・瓦集中域平面図	39
第38図	0 3 4 落込み土層図	40
第39図	0 3 4 落込み出土遺物実測図（2）	41
第40図	空測平面図	42
第41図	井戸 1 断面図	43
第42図	出土遺物実測図	44
第43図	仮設集会所位置図・断面図	45
第44図	遺構全体図	48

## 表 目 次

## 図 版 目 次

図版1 平成15年度調査地全景	調査地全景（上が西北）
図版2 平成15年度1区遺構	(上) 東半部（西から） (下) 西半部（東南から）
図版3 平成15年度1区遺構	(上) 東端（東から） (下) SD06・SD07全景（南から）
図版4 平成15年度1区遺構	(上) SD06埋土断面（南東から） (下) SD07埋土断面（南東から）
図版5 平成15年度1区遺構	(上) 中央部全景（東南から） (下) SK01埋土断面（東北から）
図版6 平成15年度1区遺構	(上) SE03埋土断面（南西から） (下) SE03遺物出土状況（南西から）
図版7 平成15年度1区遺構	(上) SE03桿検出状況（南西から） (下) SE03完掘状況（南西から）
図版8 平成15年度1区遺構	(上) SK24完掘状況（東北から） (下) SK24石組検出状況（東北から）
図版9 平成15年度2区全景	(上) SD27（東南から） (下) SD27（西北から）
図版10 平成15年度2区遺構	(上) SD27南壁埋土断面（東南から） (下) SD27中央畦埋土断面（東北から）
図版11 平成15年度2区遺構	(上) SD27北壁埋土断面（東南から） (下) SD27完掘状況（西北から）
図版12 平成16年度遺構	1. 調査区北東部全景 2. 調査区南西部全景
図版13 平成16年度遺構	1. 001自然河道全景（西から） 2. 002自然河道東半全景（東から）
図版14 平成16年度遺構	1. 002自然河道西半全景（東から） 2. 002自然河道具土層断面（東から）
図版15 平成16年度遺構	1. 002自然河道木製扉出土状況（西から） 2. 002自然河道木製扉出土状況（北から）
図版16 平成16年度遺構	1. 030溝土層断面（南から） 2. 030溝全景（南から）

- 図版17 平成16年度遺構 1. 028井戸全景（西から）  
2. 028井戸全景（南西から）
- 図版18 平成16年度遺構 1. 016溝土層断面（東から）  
2. 036井戸全景（東から）  
3. 034落込み全景（左上：北東から 右上：東から  
左下：北東から 右下：東から）
- 図版19 平成17年度遺構 a. 調査区全景（南東から）
- 図版20 平成17年度遺構 a. 調査区全景（北西部）  
b. 調査区全景（南東部）
- 図版21 平成17年度遺構 a. 井戸2検出状況（西から）  
b. 土坑3検出状況（西から）  
c. 土坑4・5・6検出状況（北西から）  
d. 井戸1検出状況（北東から）  
e. 井戸1全景（北から）
- 図版22 平成17年度遺構 a. 瓦・石溜り全景（北東から）  
b. 瓦・石溜り（南東から）
- 図版23 平成17年度遺構 a. 下層自然河川全景（東から）  
b. 下層自然河川全景（南から）
- 図版24 平成17年度遺構 a. 近世遺構面（南から）  
b. 近世遺構面（北から）
- 図版25 平成17年度遺構 a. 仮設集会所調査区全景（南から）  
b. 仮設集会所調査区全景（北東から）
- 図版26 平成15年度遺物 a. SD18北。サヌカイト製石匙（表・裏）  
b. SD06。弥生土器壺。底部穿孔。  
c. SD06。須恵器杯。墨書。（実大）  
d. SD27。弥生土器甕。  
e. SD27。弥生土器マダコ壺。  
f. SD27。土師器高杯。  
g. SK01。弥生土器甕。
- 図版27 平成15年度遺物 a. SD07。弥生土器甕。  
b. SD07。弥生土器マダコ壺。  
c. SD07。弥生土器甕。  
d. SD07。弥生土器台。  
e. SD07。弥生土器台。サヌカイト剥片。

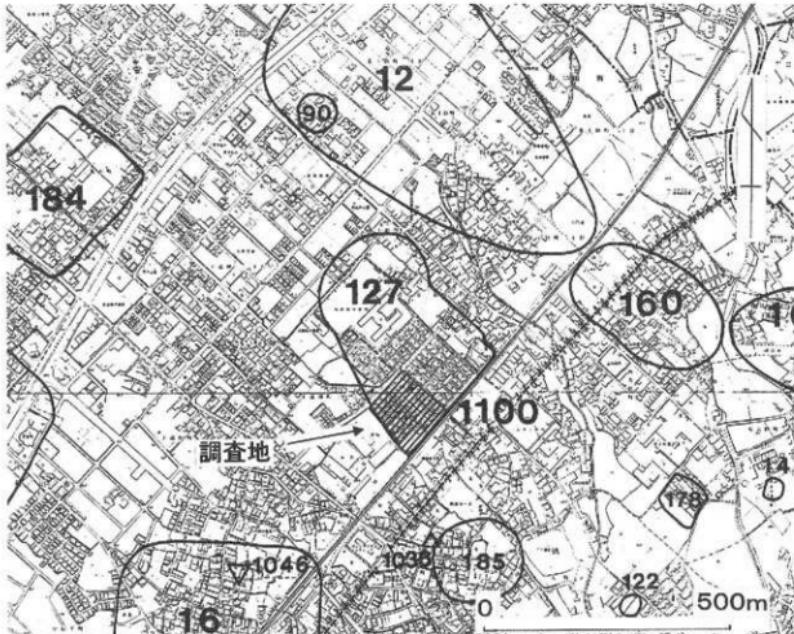
- 図版28 平成15年度遺物
- f. SD07。サヌカイト製石鑿（表・裏）。（実大）
  - a. SE03。瓦器榤（内・外面）。
  - b. SE03。土師器羽釜。
  - c. SK24。蓮華文軒丸瓦（表・裏）。
  - d. SK24。平瓦。
- 図版29 平成15年度遺物
- a. SD05。緑釉皿。青磁碗。
  - b. SD05。瀬戸茶碗。
  - c. SD05。瓦器小皿。土師器小皿。
  - d. 整地土。土師器羽釜。
  - e. SD05。瓦質羽釜。
  - f. SD05。東播甕。
  - g. SD05。生駒西麓土師器甕。
  - h. SD05。備前すり鉢。
  - i. SD05。瓦質すり鉢。
- 図版30 平成15年度遺物
- a. SD05。瓦質火舍。
  - b. SD05。瓦質火鉢。
  - c. SD05。巴文軒丸瓦（表・裏）。
  - d. SD05。唐草文軒平瓦（表・側面）。
  - e. SD05。連珠文軒平瓦（表・側面）。
- 図版31 平成15年度遺物
- a. SD05。鬼瓦。
  - b. SD05。滑石製石鍋（内・外面）。
  - c. SD05。平瓦。
  - d. SD05。サヌカイト剥片。
  - e. SD05。石硯（表・裏）。（実大）
  - f. 包含層。転用硯（須恵器杯蓋）。
- 図版32 平成16年度遺物
- a. 河道1。弥生土器壺。
  - b. 河道1。弥生土器壺。
  - c. 河道1。弥生土器高杯。
  - d. 河道2。弥生土器壺。
  - e. 河道2。弥生土器壺。
  - f. 河道2。弥生土器壺。
  - g. 河道2。土師器榤（表・裏）。
- 図版33 平成16年度遺物
- a. 河道2。木製扉。
- 図版34 平成16年度遺物
- a. O30満。青磁碗。

- b. 030溝。青磁碗（見込）。
- c. 030溝。青磁碗（外面）。
- d. 030溝。土師質捏鉢。
- e. 030溝。瓦質羽釜。
- f. 030溝。瓦質甕。
- g. 030溝。巴文軒丸瓦。
- 図版35 平成16年度遺物
- a. 028井戸。瓦器椀。
- 図版36 平成16年度遺物
- a. 028井戸。土師器皿。白磁碗。上鍤。
- 図版37 平成16年度遺物
- a. 034落ち込み。円筒埴輪（外面）。
- b. 同上内面。
- 図版38 平成16年度遺物
- a. 034落ち込み。円筒埴輪（外面）。
- b. 034落ち込み。巴文軒丸瓦。連珠文軒半瓦。綾杉文軒平瓦。
- 図版39 平成17年度遺物
- a. 井戸1。瓦器椀。瓦器小皿。
- b. 井戸1。土師器小皿。
- 図版40 平成17年度遺物
- a. 井戸1。土師器羽釜。
- b. 井戸1。土師器羽釜。
- 図版41 平成17年度遺物
- a. 井戸1。東播甕。東播ねり鉢。東播小鉢。サヌカイト剥片。
- b. 井戸1。常滑焼。青磁碗。白磁碗。白磁壺。
- 図版42 平成17年度遺物
- a. 井戸1。平瓦。
- b. 井戸1。焼石（右は紅簾片岩）。
- 図版43 平成17年度遺物
- a. 井戸1。曲物桶。鎌の柄。
- b. 瓦・石溜り。瓦質大甕。須恵器ねり鉢。瓦質ねり鉢。焼石。
- 図版44 平成17年度遺物
- a. 瓦・石溜り。平瓦。丸瓦。
- b. 河川内。須恵器杯蓋。包含層。弥生土器壺。甕（生駒西麓）。瓦質羽釜

## 第1章 調査に至る経過

本発掘調査は、大阪府教育委員会が大阪府住宅まちづくり部からの依頼を受け、平成13～17年度に岸和田市下池田町で実施したものである。

調査原因の府営住宅（建て替え）建設工事とは、老朽化した木造・簡易耐火住宅を「大阪府府営住宅ストック総合活用計画」（平成14年2月策定）に基づき、順次建て替えていくもので、1600戸／年度を目標に住宅整備課で事業を推進しているものである。工事の実施に先立って、工事予定地のすぐ北側に岸和田市域では最大級の遺跡である下池田遺跡が発見されていることから、事業主体である大阪府住宅まちづくり部住宅経営室と大阪府教育委員会事務局文化財保護課は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、埋蔵文化財の有無確認のため、工事区域の試掘調査を実施することとした。平成13年7月～8月に行なわれた試掘調査では、住宅内の空き地等に設定された5箇所のトレンチ（1.5 m × 4.0 m）すべてから弥生時代から中世の遺物が出土し、下池田遺跡の遺跡範囲が南に広がることが判明した（第1図）。



第1図 周辺遺跡分布図（127・下池田遺跡、12・箕土路遺跡、90・犬飼堂廐寺、184・荒木土塁跡、16・小松里廐寺、185・八木城跡、178・大路城跡、122・大町遺跡、14・丸山古墳、160・西大路遺跡、1100・熊野街道）

その結果をもとに、遺跡範囲の拡大の法手続きが執られると共に、協議がもたれ、住宅建て替え工事に先立って、工事区域の本発掘調査を必要とする措置が決まった。

平成14年度には、仮移転、平成15年度に撤去が行われ、平成15年10月から、工事によって地下の遺構が損壊される住棟部、設備棟、集会所の基礎部分を発掘調査することとなった。

平成16年度には、11月から翌年3月にかけて、住棟部をL字形に囲む新設の外周道路部分と防火水槽部分を発掘調査することとなった。

平成17年度には、6月から9月にかけて、外周道路の残り部分と仮設集会所部分を発掘調査することとなった（第1表、第4図）。

以上の調査結果を報告するのが、本報告書である。

## 第2章 遺跡の位置と環境

下池田遺跡（第1図127）は、大阪府岸和田市下池田町三丁目に所在する。遺跡の標高は、18～20mで、周囲は、近年に至るまで水田であった（第2・3図）。遺跡の立地は、遺跡の東側を北流する天ノ川や牛滝川によって作られたなだらかな沖積地上にある。遺跡の南東側には、JR



第2図 明治18年仮製地形図による調査地位置図

阪和線や熊野街道（1100）があり、南1.2kmには、史跡・名勝久米田池がある。

遺跡の範囲は、昭和51年の岸和田市教育委員会による八木北小学校の発掘調査以降の調査の結果、東西380m、南北450mと判明している。

遺跡の時期は、弥生時代中期に始まり、古墳時代や中世の遺物も出土しているが、中心となるのは弥生時代中期・後期のものである。

下池田遺跡の周辺には、北側に箕土路遺跡（12）がある。繩文～江戸時代にかけて遺構・遺物が多数検出された集落遺跡である。同じく箕土路遺跡内には、犬飼堂廃寺（90）がある。平安時代後期から鎌倉時代にかけての寺院跡と考えられていて、ロストル式瓦窯跡2基が確認されている。

下池田遺跡の西には、室町時代の城館跡である荒木上墨跡（184）がある。荒木土塁跡の南には、栄の池遺跡があって、弥生時代中期～後期、平安時代前期～中期の集落跡である。

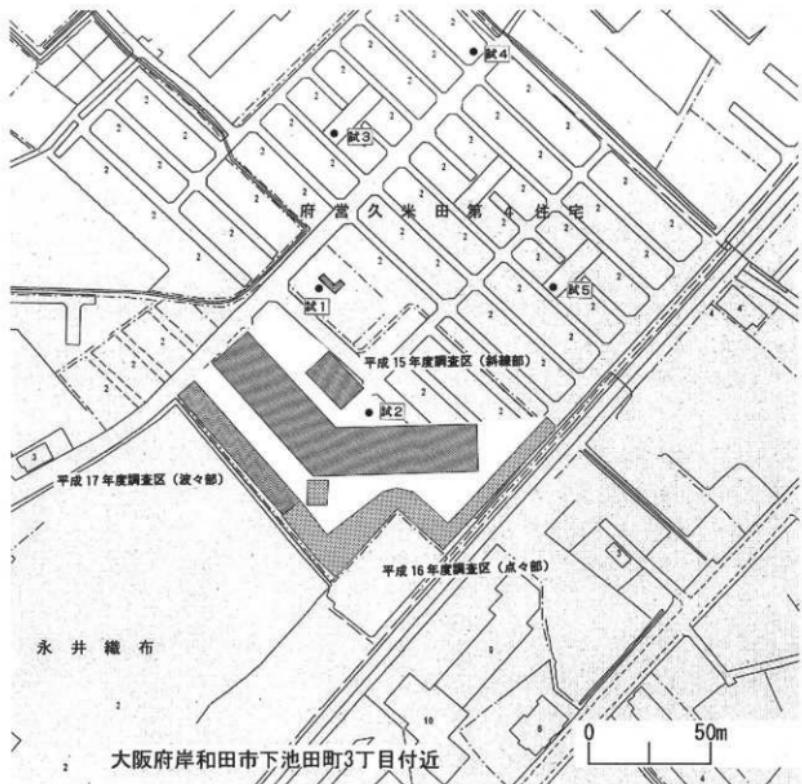
下池田遺跡の南西には、飛鳥～奈良時代の小松里廃寺（16）がある。奈良時代の鶴尾や高床建物に使われたねずみ返しなどの珍しい遺物が出土している。

下池田遺跡の南東には、八木城跡（185）や大路城跡（178）、弥生時代中期～後期の大町遺跡（122）の他、全壊しているが円墳である丸山古墳（14）などもある。

下池田遺跡の東には、弥生時代～平安時代の集落跡である西大路遺跡（160）があり、平安時代以降の今木廃寺もある。



第3図 調査地位位置図



第4図 調査区位置図

年次	種類	調査番号	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	調査地区	出土遺物 (コンテナ)	担当	主な遺構	主な遺物
H13	試掘調査	01022	30	H13.7.31～H13.8.2		1	杉本清美		弥生土器・中世土器
H15	発掘調査	03036	2,529	H15.10.20～H16.3.1	住棟・設備棟	30	藤澤真依	溝・土坑・井戸	弥生土器・須恵器・中世土器
H16	発掘調査	04050	1,160	H16.11.17～H17.3.25	外周道路・防火水槽	40	三木弘	溝・土坑・井戸	弥生土器・土師器・中世土器
H17	発掘調査	05014	567	H17.6.20～H17.8.2	外周道路	5	西口陽一	土坑・井戸	弥生土器・中世土器
		05040	22	H17.9.9	仮設集会所	1			土師器
計			4,308			77			

第1表 調査一覧表

## 第3章 調査結果

### 第1節 平成15年度の調査

調査区は2箇所で1区約2,400m<sup>2</sup>と2区290m<sup>2</sup>である。1区は幅20m、上辺57m・下辺67mの右辺が直角・左辺が斜辺の台形と左辺が直角で右辺が斜辺となる上辺55m・下辺62mの台形を斜辺同士で結合した「く」の字形をしている。「く」の字の下半部の長軸がほぼ東西方向である。2区は1区の「く」の字の内側屈曲点から右辺が斜辺となる台形側に約4m、上辺から約6m離れて長軸を平行している。

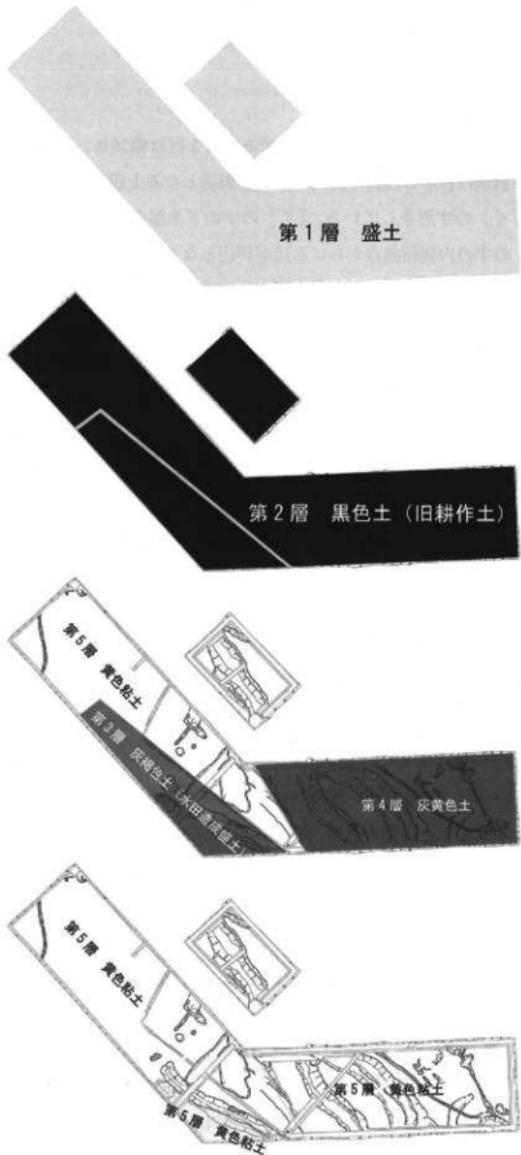
基本土層は府営住宅建築時の造成盛土が0.5~0.6m、府営住宅建築以前の水田耕作土が0.05~0.15mで黄白色粘土もしくは緑白色粘土の地山となる。しかし、1区の屈曲部頂点部から西北方に向かって約36mの点、そこから東北に約4mの点と東に18mの点を結ぶ範囲が一段高い水田となっていたため、そこには水田造成時に盛土された灰黄色土があった。この範囲の内頂点部付近は旧耕作土直下に黄白色粘土と黄茶色礫があり、地山となっている。調査地周辺の地形は全体に北に向かって傾斜しているが、東に向かっても緩やかに傾斜している。

調査で確認した遺構面は基本的には1面であり、井戸・溝・土坑等を検出した。

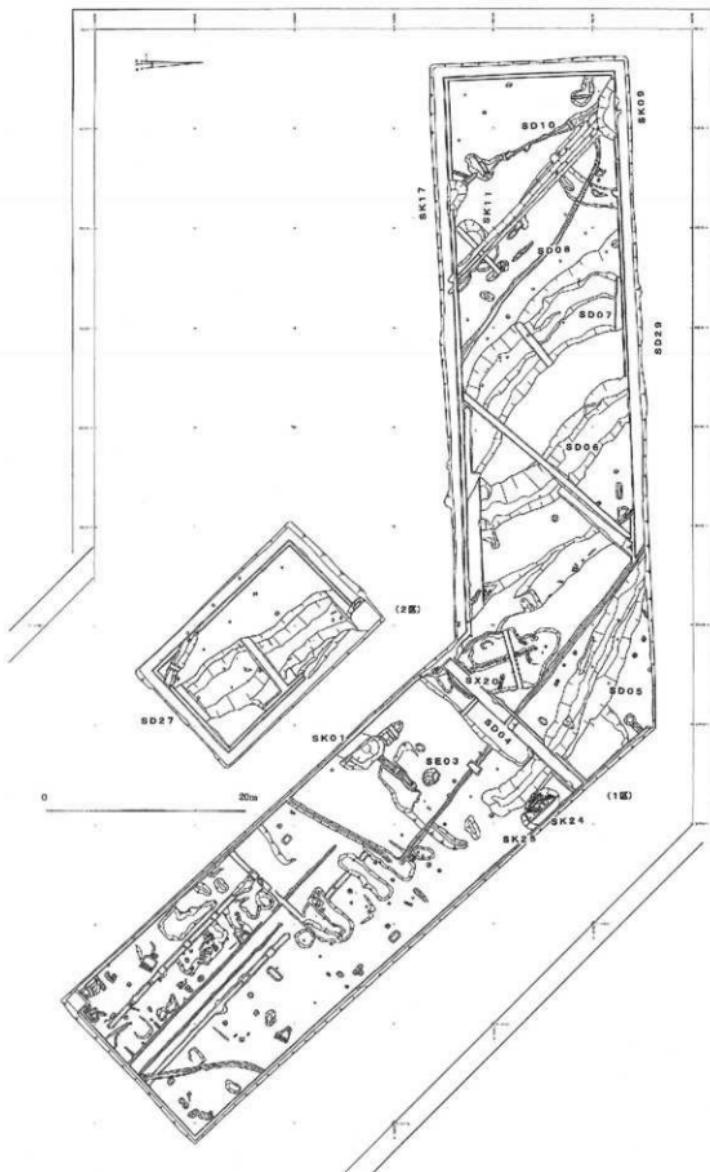
S K 01 は5B4i2区で検出した土坑である。調査区壁際で検出したため、平面形状は不整半円形で、調査区外に続く。検出直径は3.4m、深度は1.2mを測る。断面形状は西北側が約45度の傾斜で1.2mの底部まで続き、底部幅は0.5mあり、東南側は底部から約0.3mで幅0.3mのテラス部があり、約60度の傾斜で上端部まで続く。肩部の標高は東南側でT.P.+18.2m・北西側でT.P.+18.2m、底部の標高はT.P.+17.0mを測る。埋土は底部に白色砂礫0.2m、東南テラス上部に灰色砂礫0.4mと西北側斜面に張り付くように厚さ0.1mの灰色砂礫が東南側と同じ高さまで堆積していた。中央部分には西南側斜面に黒色粘土が堆積し、これを切るように灰白色砂が白色砂礫上部に0.45m堆積していた。これらの上には両肩から灰黄色土が堆積し、中央部には灰黒色粘土が0.25m、砂混じり灰色粘土が0.4m堆積していた。遺物は土師器・瓦器等（第8図）が出土した。調査当初は土坑もしくは井戸と考えていたが、堆積状況や2区の調査結果からS D 27に続く可能性のある溝の終端部かとも考えられる。

S D 02 は5B4j2区から東北に延び、5B4i3区でS K 01に続く溝である。検出長は約4.8m、肩部幅は0.6m、底部幅は0.2m、深度は0.15~0.3mを測る。断面形状は皿状である。肩部の標高は5B4j2区の東南側でT.P.+18.2m・西北側でT.P.+18.2m、5B4j1区の東南側でT.P.+18.3m・西北側でT.P.+18.2m、5B4i3区の東南側でT.P.+18.2m・西北側でT.P.+18.2mを測る。底部の標高は5B4j2区でT.P.+18.05m、5B4j1区でT.P.+17.95m、5B4i3区でT.P.+18.0mを測る。埋土は灰黄色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

S E 03 は5B4j1・2区で検出した井戸である。平面形状は不整橢円形で、長径は1.75m、短

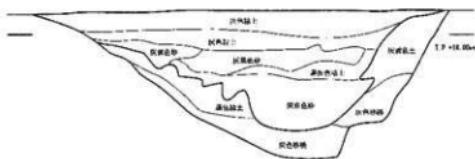


第5図 基本土層図・調査区平面模式図



第6図 調査区遺構平面図

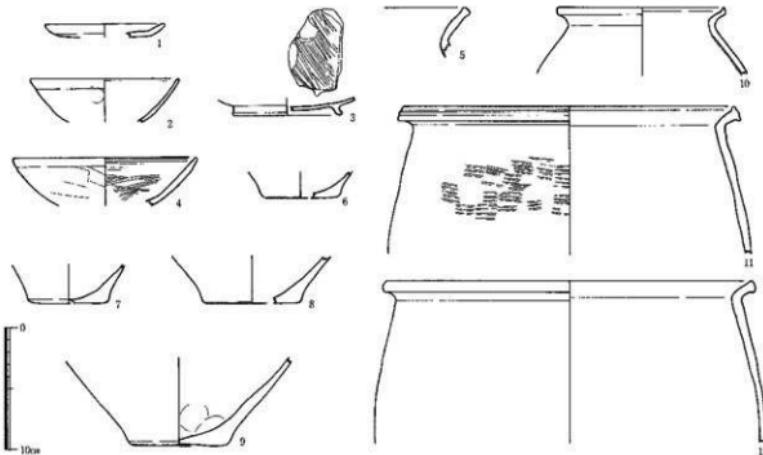
径は1.65m、深度は0.75mを測るが、東南部1/3は灰色粘土・青白色シルト・灰褐色土（黄色粘土ブロック混じり）で埋められており、直径約1.3mの円形が井戸として使用されていた時の形状である。断面形状はU字



第7図 SK01埋土断面図

形である。肩部の標高は東南側でT.P.+18.2m・北西側でT.P.+18.2m、底部の標高はT.P.+17.35mを測る。井戸枠は下部西北端に直径約50cm、高さ約30cmの曲げ物が据えられていた。枠の南に接して直径0.2m、長さ0.4mの石が置かれており、枠を固定したものかと考えられる。井戸枠内には下から青白色粘土0.05m、植物質を多量に含む灰黒色粘土が0.3m堆積していた。井戸枠外は灰色粘土で埋められていた。井戸枠より上には灰黒色粘土0.3m、灰色粘土0.2mが堆積しており、その上は灰褐色土（黄色粘土ブロック混じり）0.25mで埋められていた。灰色粘土層内から瓦器楕等（第10図）、灰褐色土（黄色粘土ブロック混じり）からは（第10図21）が出土した。

S D 04 は5C4a1区から始まり真っ直ぐ東北方向に延び5B3j1区で調査区外に続く溝である。検出長は約13.5m、肩部幅は2.5~3.0m、底部幅は1.5~2.0m、深度は0.15~0.3mを測る。断面形状は椀状である。肩部の標高は5C4a1区の東南側でT.P.+18.3m・西北側でT.P.+18.2m、5B3j1区の東南側でT.P.+18.2m・西北側でT.P.+18.2m、5B3j4区の西北側でT.P.+18.3mを測る。底部の標高は5C4a1区でT.P.+18.05m、5B3j4区でT.P.+17.9m、5B3j1区でT.P.+18.0mを測る。灰黄色



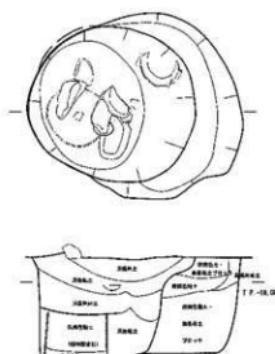
第8図 SK01出土遺物実測図

土が堆積していた。遺物は中世の土師器の小破片が出土した。

S D 05 は5C2b3区から5B4j4区で検出した溝である。5C2b3区調査区域外からほぼ真直ぐ西北西方向に21m延び5C4a3区で西北方向に向きを変え8.5m延び5B4j4区で終わる。幅は2.0~2.5m、検出長は29.5m、深度は0.3mを測る。肩部の標高は5C2b3区の南南西側でT.P.+18.4m・北北東側でT.P.+18.3m、5B4j4区の先端部分でT.P.+18.3mを測る。底部の標高は5C2b3区でT.P.+18.1m、5B4j4区でT.P.+17.9mを測る。断面形状は楕形で、埋土は下から灰黒色粘土<sup>0.1</sup>m、灰色粘土<sup>0.2</sup>m堆積していた。遺物は灰色粘土から中世の羽釜や瓦等（第11・12図）が大量の栗石とともに出土した。灰黒色粘土からは遺物が出土しなかった。

S D 06 は4C10b2区調査区域外から西南に延び5C1a3区で北北西に屈曲し、5B1j4区で調査区域外に続く溝である。検出長は約19.5m、肩部幅は3.3~4.2m、底部幅は0.6~2.2m、深度は0.9~1.2mを測る。断面形状は部分的に異なっている。5C1b区では口の開いたU字形であり、底部が僅かに西南に寄っている。5C2a区では底部幅が0.6mと狭くなり片方が垂直に近いV字形を呈し、底部が西南側に寄っている。肩部の標高は4C10b区の東北側でT.P.+18.0m・西南側でT.P.+17.8m、5C1a区の東北側でT.P.+17.9m・西南側でT.P.+18.0m、5B1j区の東北側でT.P.+17.8m・西南側でT.P.+17.9mを測る。底部の標高は4C10b区でT.P.+17.0m、5C1a区でT.P.+16.9m、5B1j区でT.P.+16.9mを測る。肩部・底部標高から東南から西北方向へ流れていると考えられる。埋土は南西側から⑧白色シルト・⑦灰色シルト、東北側から⑥灰黒色粘土が堆積し、中央部には⑤灰色砂礫・④灰色粘土・③灰黒色粘土が堆積していた。遺物は下層⑥灰黒色粘土や⑦灰色シルトから庄内式土器併行期の土器等（第14図）が、上層③灰黒色粘土からは「阪上」と読めそうな墨書のある須恵器杯（第14図63）等が出土した。

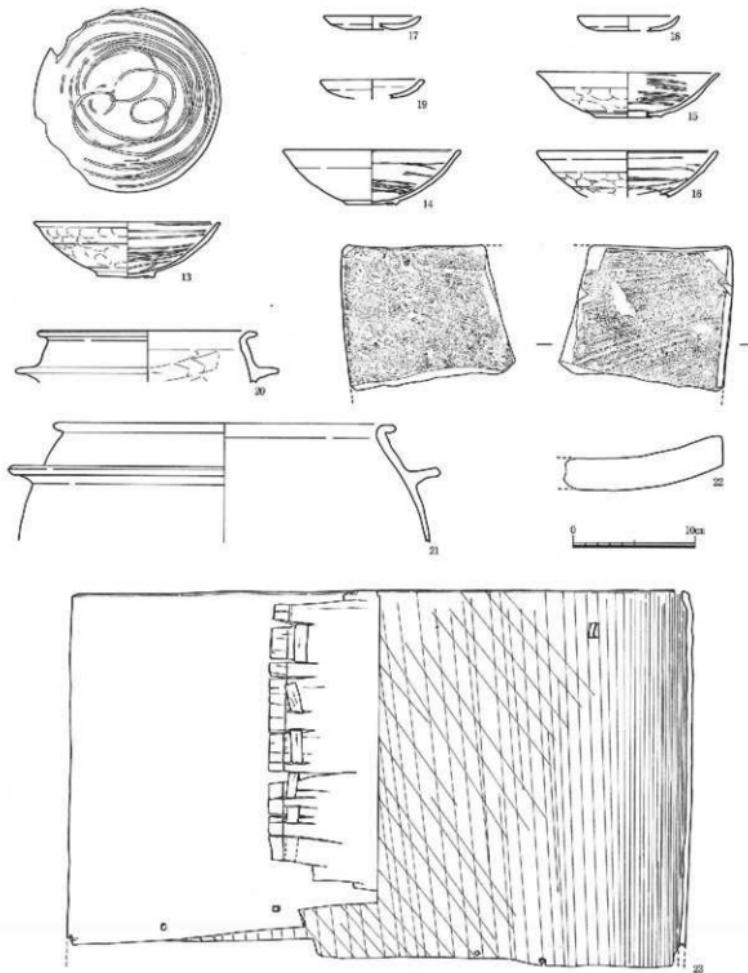
S D 07 は4C9b1・2区調査区域外から北に延び、4C9a4区で西北方向に湾曲し5B1j3区で調査区域外に続く溝である。検出長は約22.0m、肩部幅は5.0~8.0m、底部幅は1.2~2.0m、深度は0.9~1.2mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。底部幅は4C9b1から4C10a1・2区までは2.0mであるが、4B10j2区では1.2mと狭くなる。肩部の標高は4C10b区の東北側でT.P.+18.1m・西南側でT.P.+18.2m、5C1a区の東北側でT.P.+18.0m・西南側でT.P.+17.9m、5B1j区の東北側でT.P.+18.2m・西南側でT.P.+18.1mを測る。底部の標高は4C9b1・2区でT.P.+17.7m、5C10a1区でT.P.+17.4m、4B10j4区でT.P.+17.4mを測る。肩部・底部標高から流れは東南から西北方向へと考えられる。埋土は下部には東北側から⑩灰色砂・⑪灰白色砂、西南側から⑬灰色砂礫が堆積し、上部には⑫灰白色砂



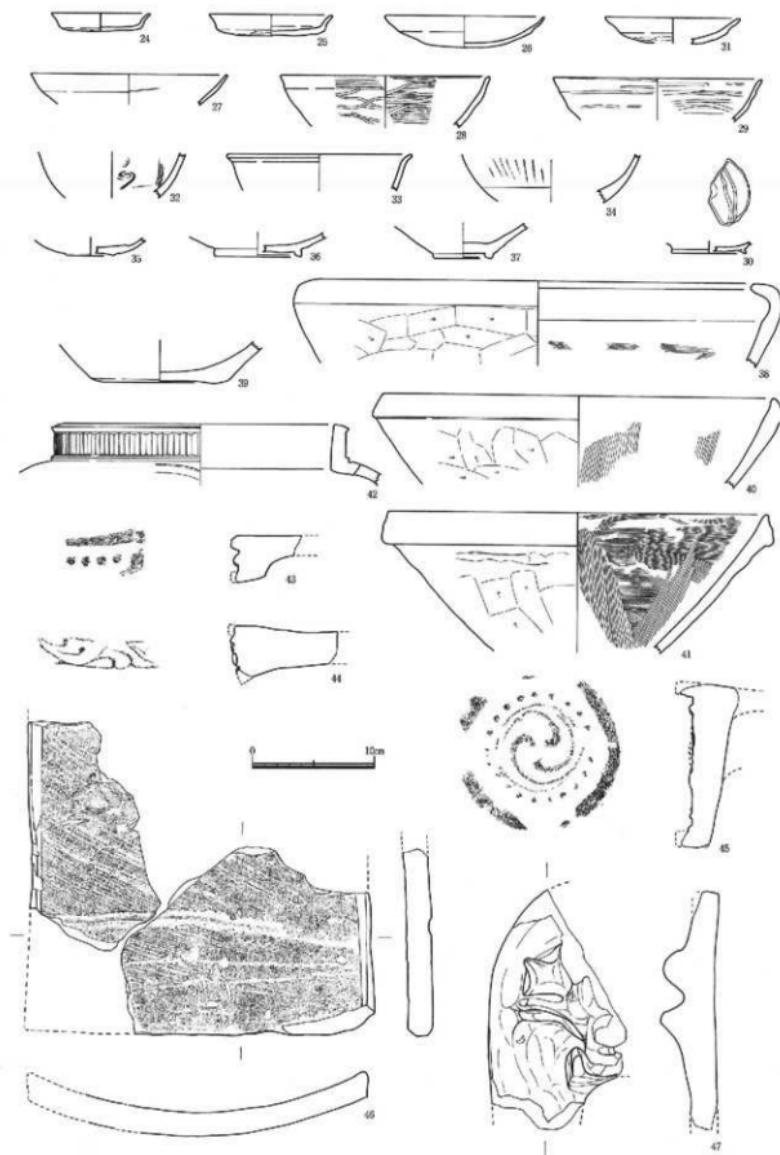
第9図 SD 07平面図・埋土断面図

疊が堆積している。遺物は庄内式土器併行期の土器等（第15図）が灰黒色粘土から出土した。

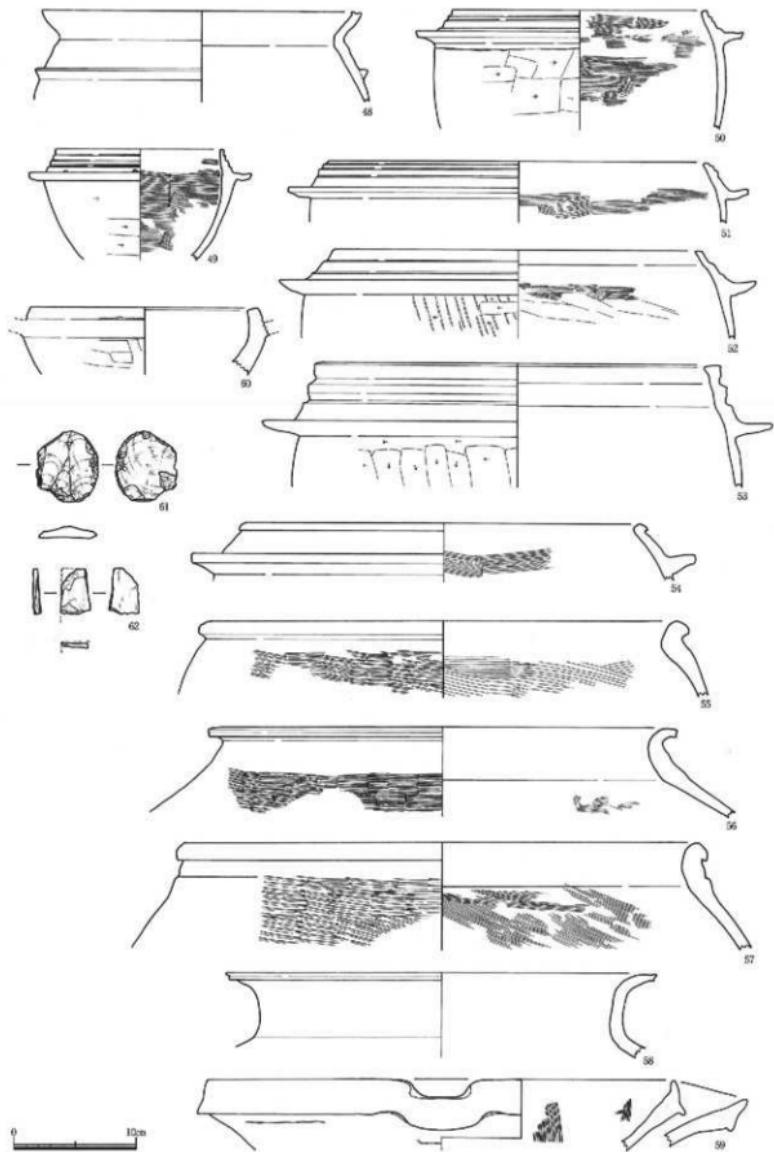
S D 29 は5C1b・4C10b・4C9b区調査区外から西北に延び、5B2j・5B1j・4B10j区で調査区内に続く溝である。S D 06・07全体を含む範囲である。検出長は約22.0m、肩部幅は約22.0m、底部幅は約20.0m、深度は0.9~1.2mを測る。断面形状は幅の広いU字形である。肩部の標高は5C1b区でT.P.+18.3m、4C9b区でT.P.+18.1m、5B2j区でT.P.+18.2m、4B10j区でT.P.+18.0mを



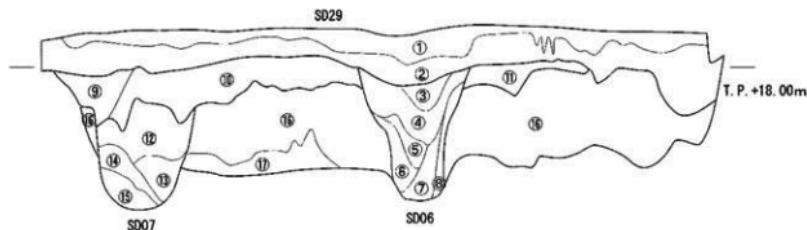
第10図 S E 03出土遺物実測図



第11図 SD05出土遺物実測図（1）



第12図 S D05出土遺物実測図（2）

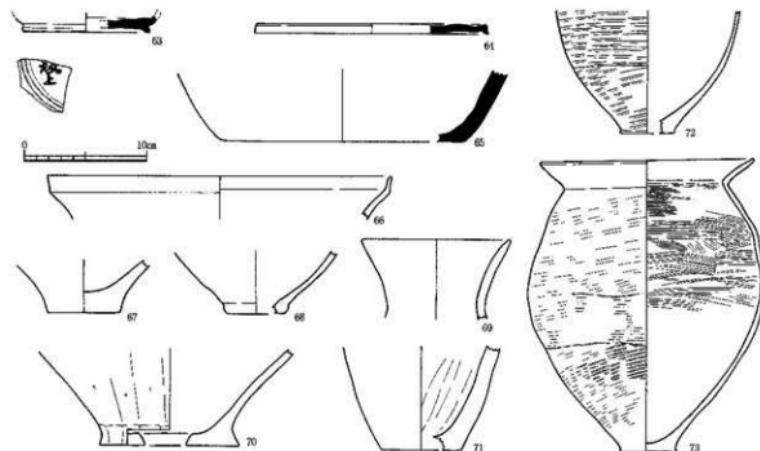


第13図 SD06・07・29埋土断面図

測る。底部の標高はT.P.+17.4m～17.6mを測り、SD06・07が部分的に深くなっているところもある。肩部・底部標高から流れは東南から西北方向へと考えられる。

埋土は下部には東北側から⑯灰色砂・⑮黄白色砂砾が堆積していた。遺物は弥生時代の土器片が少量出土した。

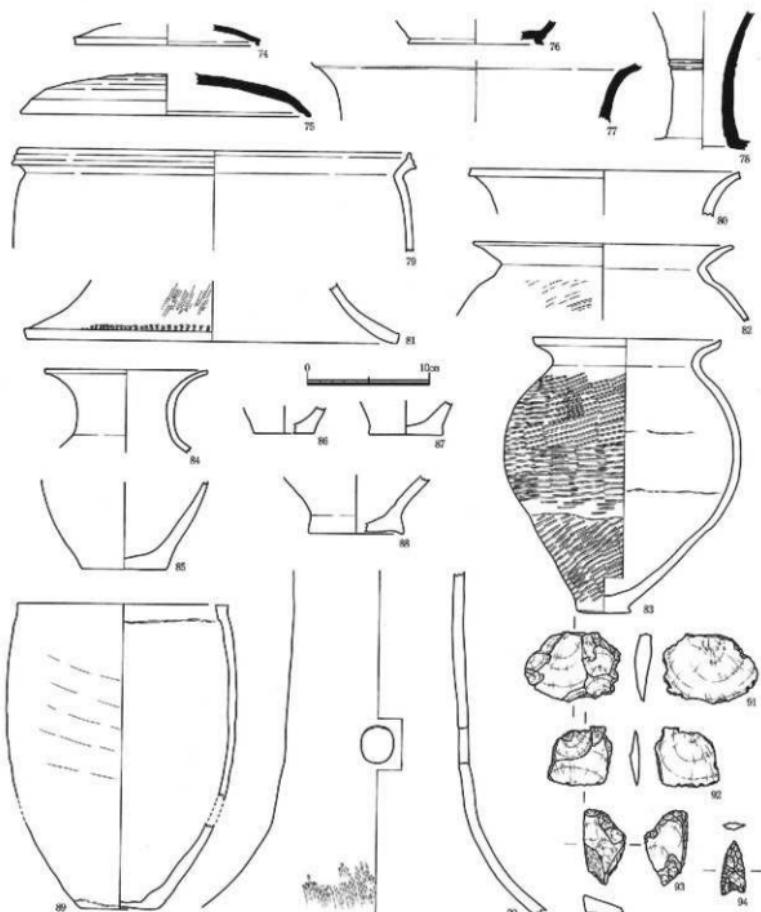
SD08は4C7b2区のSK09から西に3.5m延び西北方向に屈曲し、4B10j3区で調査区外に統く溝である。検出長は約28.5m、肩部幅は0.3～0.7m、底部幅は0.1～0.4m、深度は0.15～0.4mを測る。断面形状はU字形である。肩部の標高は4C7b2区の北側でT.P.+18.3m・南側でT.P.+18.3m・4C8a4区の東北側でT.P.+18.3m・西南側でT.P.+18.3m、4B10j3区の東北側でT.P.+18.0m・西南側でT.P.+18.05mを測る。底部の標高は4C7b2区でT.P.+18.0m、4C8a4区でT.P.+18.05m、4B10j3区でT.P.+17.5mを測る。肩部・底部標高から流れは東南から西北方向へと考えられる。



第14図 SD09出土遺物実測図

埋土は下から茶褐色粘土が0.1~0.3m、灰黄色粘土が0.05~0.1m堆積していた。遺物は出土しなかった。

S K 09 は4C7b2区で検出した土坑である。調査区壁際で検出したため、平面形状は不整半円形で、調査区外に続く。検出長径は6.4m、検出短径は2.0m、深度は1.0mを測る。断面形状は幅の広いU字形である。埋土は底部から黒色粘土が0.5m、灰色砂0.1m、灰黑色粘土0.3m、灰黄色粘土が0.1m堆積していた。遺物は出土しなかった。

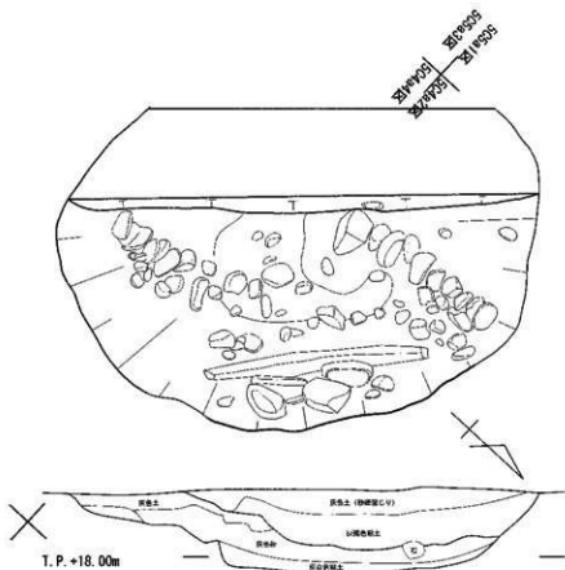


第15図 S D07出土遺物実測図

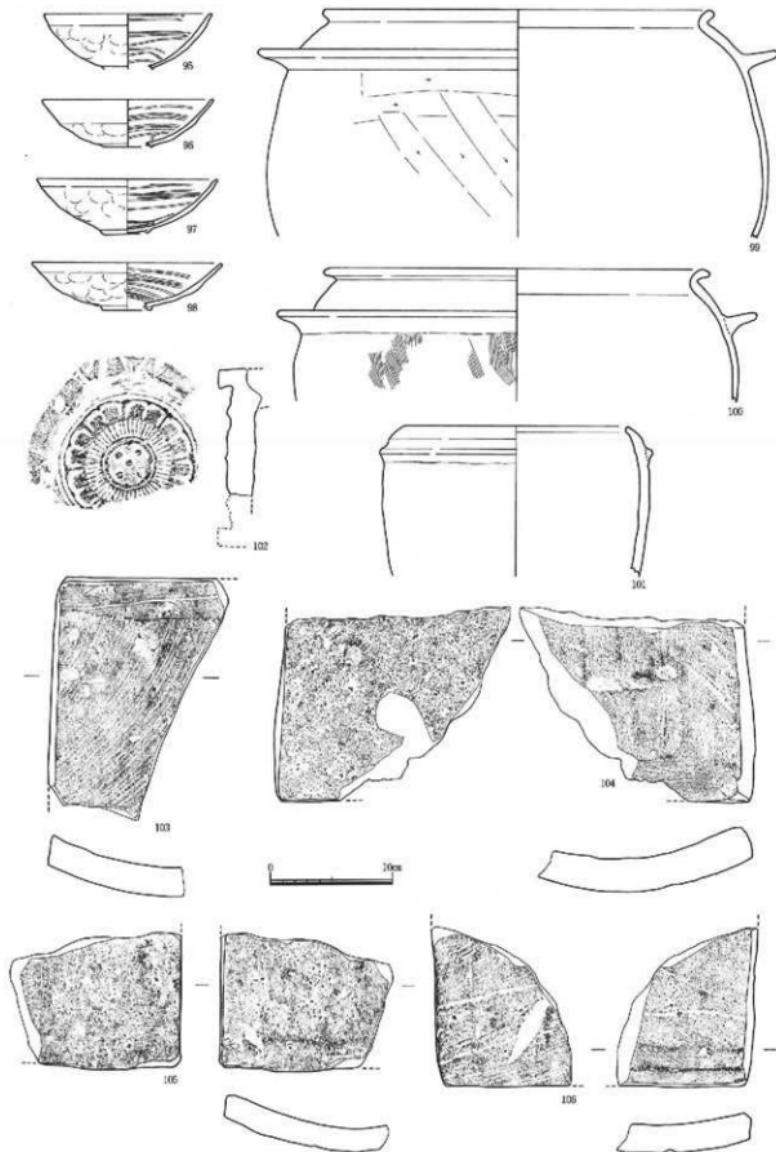
S D 10 は4C7b2区のS K 09から北北西に延び、4B8j4区のS K 17に繋がる溝である。4C7b2区では幅が1.0mで約5.5m延び、幅が0.25mと細くなり約6.0m延びて4B8j3区で底辺3.0m・高さ2.6m・深度0.5mの不整二角形の土坑状になり、再び幅0.25mの細い溝状になって約1.4m延びてS K 17に繋がる。検出長は約15.0m、断面形状はU字形である。肩部の標高は4C7b2区の東北側でT.P.+18.1m・西南側でT.P.+18.1m、4C8a1区の東北側でT.P.+18.1m・西南側でT.P.+18.1m、4B8j3区の東北側でT.P.+18.1m・西南側でT.P.+18.15mを測る。底部の標高は4C7b2区でT.P.+17.9m、4C8a1区でT.P.+17.9m、4B8j3区でT.P.+18.0mを測る。肩部・底部標高から流れは東南から西北方向へと考えられる。埋土は下から茶褐色粘土が0.05~0.1m、灰黄色粘土が0.05~0.1m堆積していた。遺物は出土しなかった。

S K 11 は4B9j3区で検出した長軸を東北から南西に向けた楕円形の土坑である。長径は3.4m、短径は3.4m、深度は1.2mを測る。断面形状は椀状である。肩部の標高は東南側でT.P.+18.15m・西北側でT.P.+18.15m、底部の標高は4C7b2区でT.P.+17.7mを測る。埋土は下から灰色粘土が0.15~0.25m、黄色粘土・黒褐色粘土のブロック土が0.2~0.3m堆積していた。遺物は出土しなかった。

S D 12 は4C8b2区調査区外から北に4.5m延び、4C8a4区で東北方向に湾曲し4.5m延びて4C8a3区で終わる。検出長は約9.0m、肩部幅は1.7~2.0m、底部幅は1.4m、深度は0.1~0.2mを測る。



第16図 S K 24平面図・埋土断面図



第17図 SK 24出土遺物実測図

断面形状は浅い皿状である。肩部の標高は4C8b2区の東側でT.P.+18.3m・西側でT.P.+18.3m、4C8a4区の東南側でT.P.+18.3m・西北側でT.P.+18.3m、4C8a3区の東南側でT.P.+18.3m・西北側でT.P.+18.3mを測る。底部の標高は4C8b2区でT.P.+18.2m、4C8a4区でT.P.+18.15m、4C8a3区でT.P.+18.1mを測る。埋土は灰黄色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

S D 15 は4C9a1区で東南から西北方向に延びる溝である。検出長は約2.3m、肩部幅は0.4m、底部幅は0.2m、深度は0.2mを測る。断面形状は皿状である。肩部の標高は東北側でT.P.+18.2m・西南側でT.P.+18.2m、底部の標高はT.P.+18.0mを測る。埋土は灰黄色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

S D 16 は4C9a1区と4B9j3区で東南から西北方向に延びる溝である。検出長は約2.1m、肩部幅は0.6m、底部幅は0.3m、深度は0.1mを測る。断面形状は皿状である。肩部の標高は東北側でT.P.+18.35m・西南側でT.P.+18.3m、底部の標高はT.P.+18.25mを測る。埋土は灰黄色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

S K 17 は4B8j4区で検出した土坑である。調査区壁際で検出したため、平面形状は長軸を東南から北西を向く不整楕円形で、調査区外に続く。検出長径は2.9m、検出短径は2.25m、深度は1.05mを測る。断面形状はU字形である。埋土は底部から黒色粘土が0.5m、灰色砂0.1m、灰黑色粘土0.3m、灰黄色粘土が0.1m堆積していた。遺物は出土しなかった。

S D 18 は5B3g3区調査で東南から西北方向延びる溝であり、両端は調査区外に続く。検出長は約6.5m、肩部幅は1.0~1.2m、底部幅は0.3~0.4m、深度は0.5~0.6mを測る。断面形状はV字形である。肩部の標高は東北側でT.P.+17.9m・西南側でT.P.+17.9m、底部の標高は東南部でT.P.+17.4m、西北部でT.P.+17.3mを測る。肩部・底部標高から流れは東南から西北方向へと考えられる。埋土は黒褐色粘土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

S D 19 は4C8a2区と4C9a1区で東南から西北方向に延びる溝である。検出長は約2.15m、肩部幅は0.6m、底部幅は0.3m、深度は0.1mを測る。断面形状は皿状である。肩部の標高は東北側でT.P.+18.3m・西南側でT.P.+18.3m、底部の標高はT.P.+18.2mを測る。埋土は灰黄色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

SX20 は5B3j3・4・5C3a1・2・3区で検出した不整楕円形の土坑である。長軸は南南東から北北西を向いている。長径は3.4m、短径は3.4m、深度は1.2mを測る。断面形状は皿状である。肩部の標高は南南東側でT.P.+18.35m・東北東側でT.P.+18.2m、西南西側でT.P.+18.2m・北北西側でT.P.+18.25mを測る。底部の標高はT.P.+17.8m~T.P.+18.05mを測り、内部に地山を削り残した畠状の高まりが数箇所に認められる。埋土は灰褐色土と灰黄色土のブロック上である。遺物は土師器・瓦器等とともに近代のガラス瓶が出土した。底面の形状や平面形状が近現代水田の区画溝に影響されていることなどから粘土採り穴と考えられる。

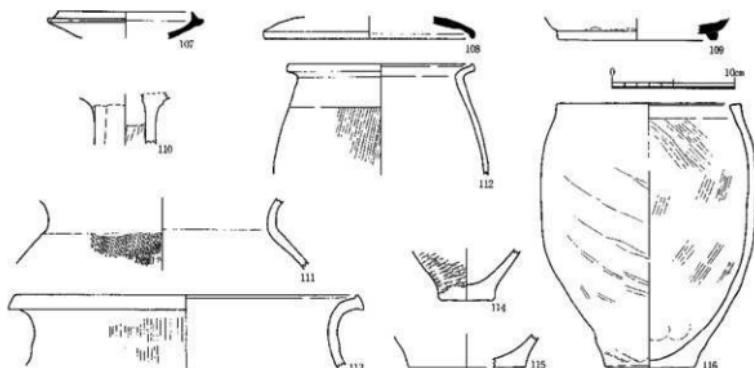
S D 21 は5B7h3区から湾曲しながら5B7g2区まで北方向延びる溝であり、両端は調査区外に続く。検出長は約12.5m、肩部幅は0.4~0.6m、底部幅は0.2~0.3m、深度は0.05~0.1mを測る。



第18図 S D27埋土断面図

断面形状は椀状である。肩部の標高は南側でT.P.+18.4 m・北側でT.P.+18.45 m、底部の標高は南部でT.P.+18.35 m、北部でT.P.+18.35 mを測る。埋土として掘削したのは黒褐色粘土であった。遺物は出土しなかった。水田造成時の削平により水田耕作土を除去すると地山粘土上面が検出された地区であり、黒褐色粘土は本来の埋土ではなく、遺構直下の変色土であった可能性が極めて高い。

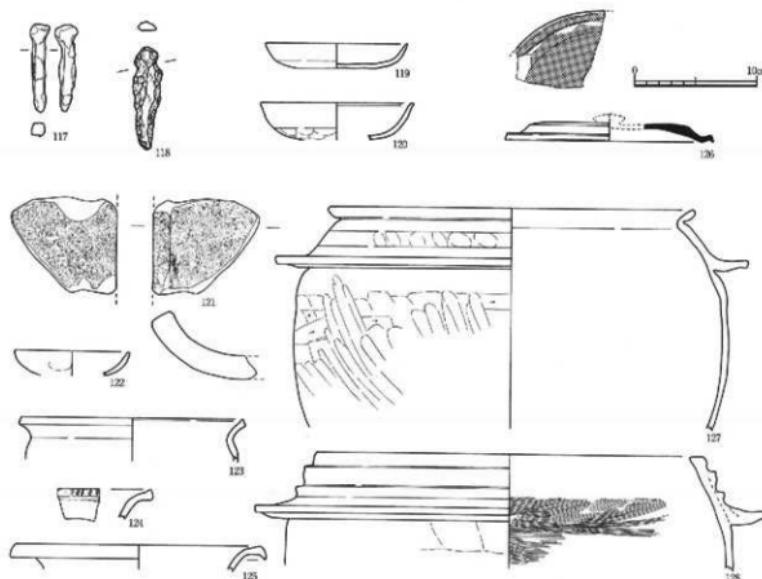
S K 24 は5C4a2・5C4a2区で検出した土坑である。調査区壁際で検出したため、平面形状は長軸が西北～東南梢円形で、調査区外に続く。長径は約4.0 m、検出短径は2.5 m、深度は0.7 mを測る。断面形状は皿状である。肩部の標高は西北側でT.P.+18.4 m、東南側でT.P.+18.5 m、底部標高はT.P.+17.8 mを測る。埋土は底部に灰白色粘土が0.1 m、灰色砂が0.1 m、灰褐色粘土が0.3 m、灰色土（砂礫混じり）が0.2 m堆積していた。灰白色粘土上面から肩部にかけて0.1～0.4 m大の石が並べられており、東北側には長軸に平行して直径0.15 m、長さ1.8 mの木が出土した。この木と石は一緒に置かれていたもので、井戸の水汲み場のようなものと考えられる。遺物は土師器・瓦器・瓦等（第17図）が出土した。



第19図 S D27出土遺物実測図

S K 25 は5C4a2区で検出した土坑である。S K 24に切られており、平面形状は不明であるが、円形もしくは橢円形と考えられる。検出長径は2.0m、検出短径は0.8m、検出深度は0.3mを測る。肩部の標高はT.P.+18.4 m、検出底部標高はT.P.+18.1 mを測る。埋土は灰褐色土で、遺物は中世の羽釜の破片が出土した。

S D 27 は5B2i2区から5B3g4区で検出した溝である。5B2i2区調査区域外からほぼ真直ぐ西南方向に及び5B3g4区で調査区域外に続くが、5B3h4区で西南方向にも続く。幅は4.8~5.7 m、検出長は19.0 m、深度は1.5 mを測る。断面形状は緩やかなV字形である。底部幅は5B2i2から5B3h3区までは1.2 mであるが、5B3g4区では2.2 mと広くなる。肩部の標高は5B2i2区の東北側でT.P.+17.9 m・西南側でT.P.+18.2 m、5B3g4区の東北側でT.P.+17.9 m・西南側でT.P.+17.9 m、5B3h4区の東南側でT.P.+17.7 m・西北側でT.P.+17.9 mを測る。底部の標高は5B2i2区でT.P.+16.8 m、5B3g4区でT.P.+16.6 mを測る。5B3h4区では高くT.P.+17.4 mを測るが、合流点ではT.P.+17.2 mと僅かに低くなっている。肩部・底部標高から流れは東南から西北方向へ、枝分かれ部分も西南方向から合流していたと考えられる。埋土は下から灰色砂・灰色粘土互層が東北側で約0.4 m・西南側で約0.2 m、灰色シルトが東北側で約0.3 m・西南側で約0.15 m、灰色粘土が東北側で約0.25 m・西南側で約0.5 m堆積していた。灰色砂・灰色粘土互層からは第19図111~116の土器が出土した。これらを切って2条の溝が流れていた。西南側が古く、東北側が西南側の溝の堆積を切っ



第20図 S X 20、S D 26他出土遺物実測図

ていた。西南側の肩部幅は約1.6m、底部幅は0.45m、深度は0.7mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。肩部標高はT.P.+17.8m、底部標高はT.P.+17.1mを測る。埋土は下から灰色粘土・灰色砂瓦層が0.15m、黒色粘土が0.05m、西南側から砂混じり灰黒色土が0.3~0.05m斜めに、水平に覆うように黄色粘土・黒褐色粘土瓦層が0.3m、灰褐色粘土が0.15m堆積していた。この上に全体を覆うように黄色粘土・黒褐色粘土瓦層が0.55mが堆積していた。この黄色粘土・黒褐色粘土瓦層から第19図107~110の土器が出土した。これらを切ってもう1条の溝が掘削されていた。肩部幅は2.2m、底部幅は0.4m、深度は0.95mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。肩部標高はT.P.+17.95m、底部標高はT.P.+17.0mを測る。埋土は下から青緑色砂礫が0.15m、灰色粘土・黒色粘土瓦層が0.25m、黒色粘土が0.05m、灰黒色粘土が0.15m、黄白色粘土が0.05m、白色砂が0.3m堆積していた。白色砂は西南方向に統いて堆積していた。遺物は下層から真蛸壺（第19図116）等、上層からは須恵器（第19図107・108）等が出土した。

S D 30 は5B 3j 2区から始まり5B 4i 3区までまっすぐ西北に延び、S K 01に続く溝である。長さは約2.7m、肩部幅は1.5m、底部幅は0.4~0.6m、深度は0.2~0.25mを測る。断面形状は皿状である。肩部の標高は5B 3j 2区でT.P.+18.25m、5B 4i 3区の東北側でT.P.+18.25m・西南側でT.P.+18.2m、を測る。底部の標高は5B 3j 2区でT.P.+18.05m、5B 4i 3区でT.P.+18.0mを測る。肩部・底部標高から流れは東南から西北方向へと考えられる。埋土は下から灰色粘土が0.1m、灰黄色土が0.1~0.15m堆積していた。遺物は中世の土師器の小破片を出土しただけである。

調査結果から縄文時代と考えられる石匙、弥生時代の土器、古墳時代初頭の上器、古代~中世の土器・瓦等各時代の遺物が出土した。ただ、本来深く掘り込まれる遺構しか検出されていないことや水田造成時に削平されたことが明らかであることなどから、調査地周辺は後世に相当改変されたものと考えられる。

## 第2節 平成16年度の調査

### (1) 001自然河道

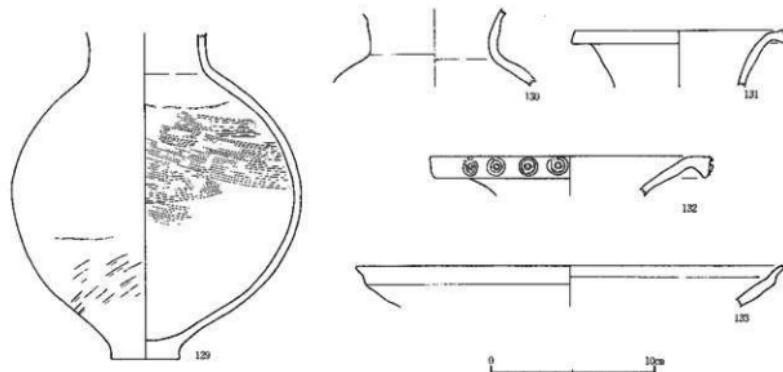
現状での最大幅14mを測る自然河道である。当初の河道部分の深さは0.2~0.3mで、底面は平坦に近い。それに比べて側辺は、短間隔で屈曲を繰り返し、いびつである。

東辺から1m西寄りで幅3~4mにわたって一段下がっている。上層断面からは、当初の幅広の自然河道が埋没したのち、後出の流路が新たに切り込んでいる状況を窺うことができる。つまり、河道の西から埋没が始まり、一端はほぼ埋没する。しかし、最後まで通水していた東岸付近の軟弱な部分に新たな流水が生じ、埋没土を削り込んで小河道（後出流路）が形成されたと考えられるのである。後出流路の深さは0.4mほどである。

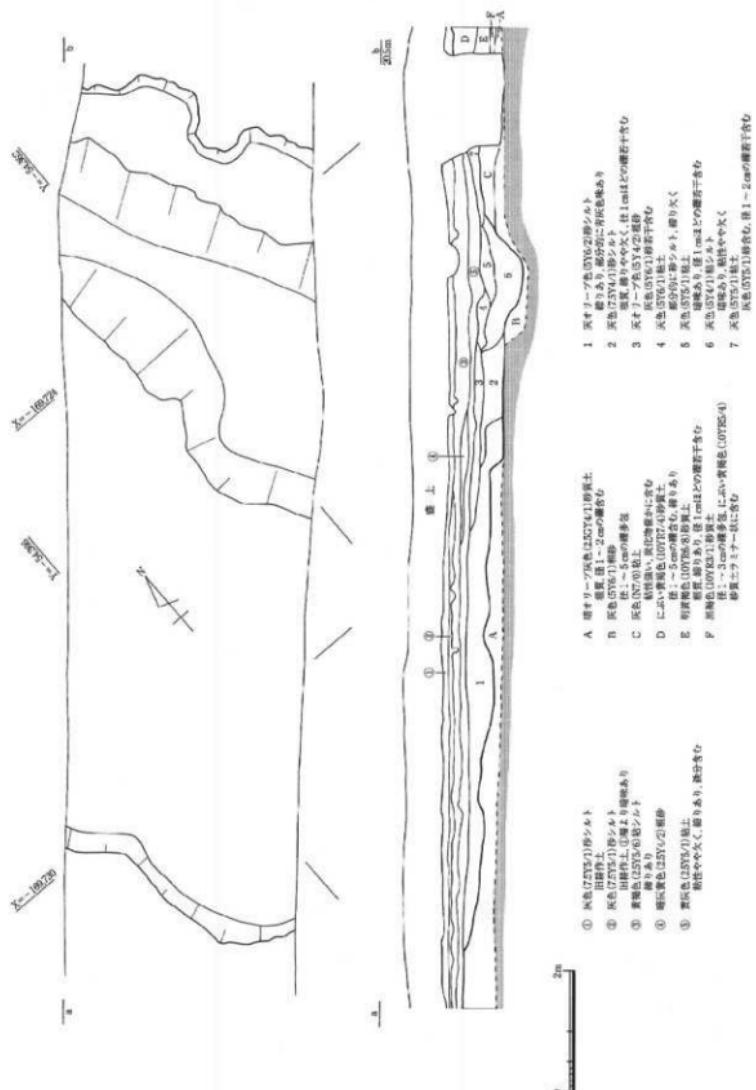
河道内の堆積土は、後出流路を除くと、灰色系の砂・砂シルトを基調としている。ことに堆積土の主体を占める1層（灰オリーブ色砂シルト）や2層（灰色砂シルト）は、基盤層であるA層（暗オリーブ色砂質土）やC層（灰色粘土）が削られて再堆積したものである可能性が高い。

一方、後出流路は灰色系粘土が主体であり、先行する堆積土とは明瞭に異なる。上流側の基盤層の粘土が流入したのであろう。

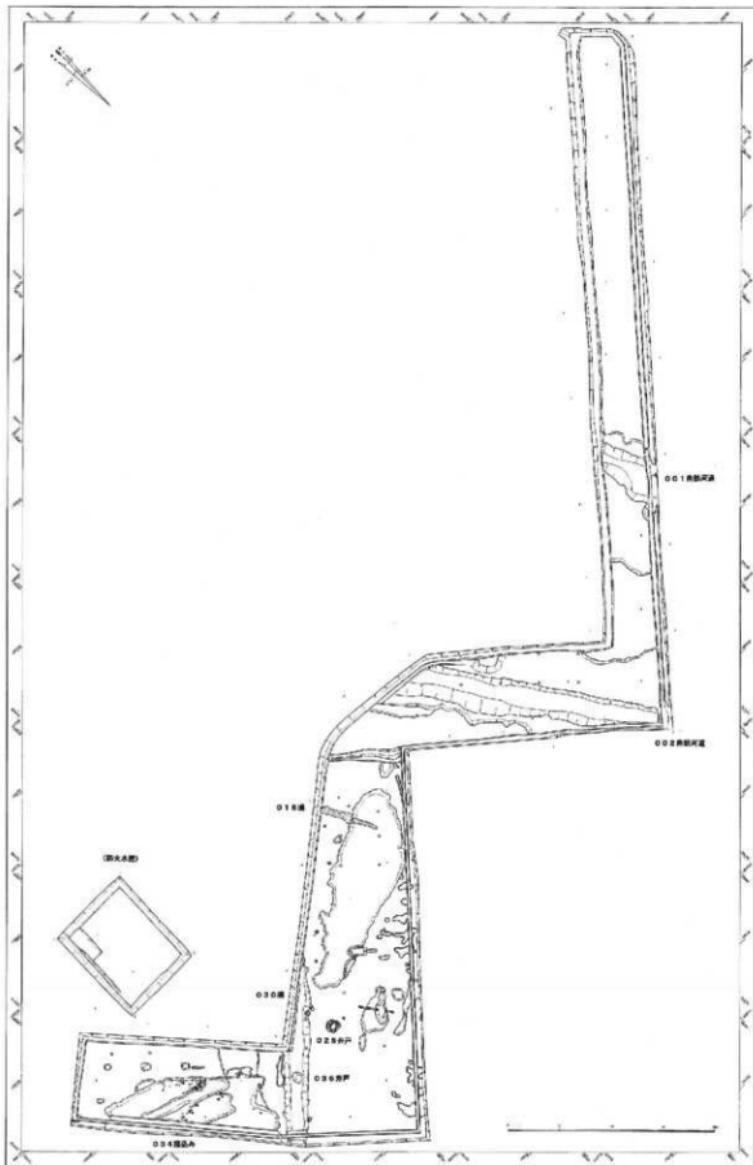
出土遺物はすべて土器である。小破片が多いが、器種については壺、甕、高杯が認められる。さらに壺には有段口縁壺と広口壺もあるが、いずれも詳細は不詳である。よって、時期の推定できるものも少ないが、口縁部に円形浮文を貼り付けた壺（132）の1点が庄内期の可能性もつものの、大半が弥生期の弥生土器であるとみられる。これらはいずれも後出流路から出土した。したがって当初の001自然河道は弥生V期以前に、後出流路については弥生V期に形成され、後者は庄内期に埋没したと考えられる。



第21図 001自然河道出土遺物実測図



第22図 001 自然河道平面図・土層図



第23図 空測平面図

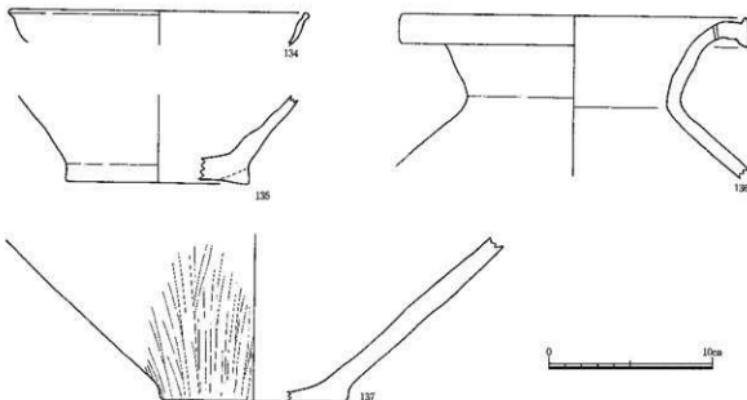
## (2) 002自然河道

長さ24mほどにわたって検出したが、南北部および東辺のほとんどが調査区外にある。2段掘り状を呈し、幅は現状で8m、1段下がった部分で約4mである。河道肩から最下底までの深さは0.8~1.0mを測る。河道上段部の底面は中央に向って緩やかに下降し、下段部は平坦である。河道内の西寄りに最終の通水があり、その部分の埋没によって河道は完全に機能を停止した。河道の通水が西方向に移動することは、この地域ではしばしば認められる。

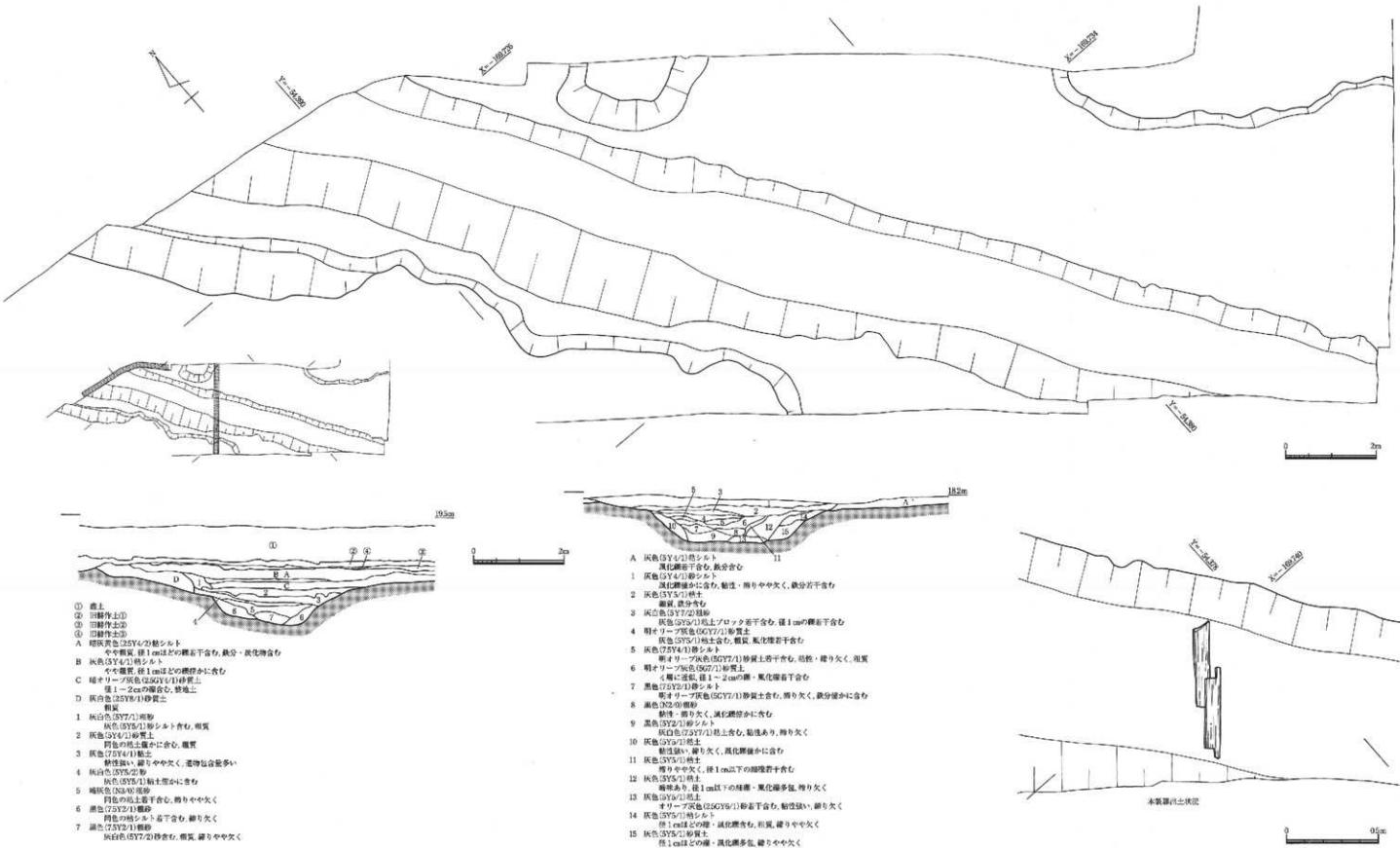
堆積土はおよそ3段階に分かれる。下層は黒色系の砂・砂シルト、中層は灰色系の粘土・粘シルト、そして上層は灰色系の砂・砂シルトである。先の001自然河道の堆積土を勘案すると、中層段階の堆積土と001自然河道の後出流路のそれとが対応しているとみられる。

南辺より北約4mほどの下段部分内で、木製の扉が出土した。片側1枚分が半分に割れ、上下に重なった状態で検出された。その位置は、底面より0.4~0.5mほど高い、黒色系砂・砂シルトと灰色系粘土・粘シルトとの境界にある。

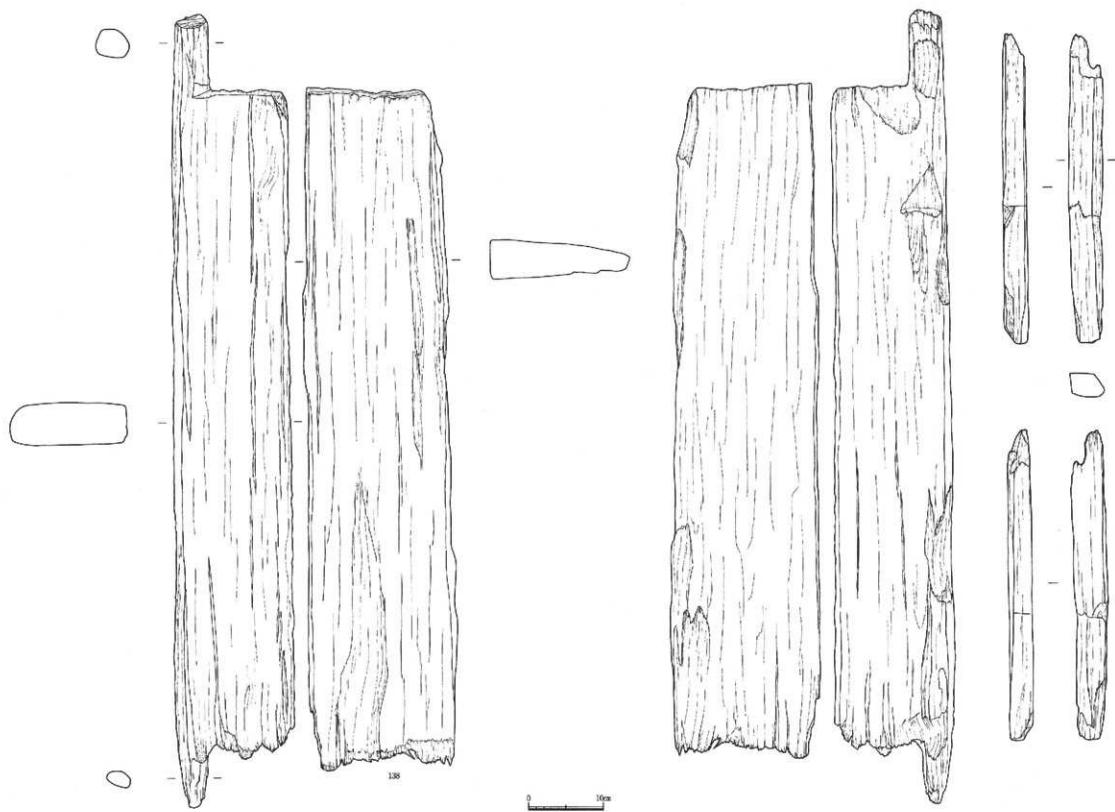
河道上面を覆う堆積土および河道内覆土から100点近い遺物が出土した。上面の堆積土からは須恵器、黒色土器、瓦器が出土し、磁器も含まれていた。磁器は、小破片3点だけなので、上層の盛土からの混入とみられる。したがって堆積土は、平安時代後期頃に最終形成されたと考えられる。一方、河道内覆土から出土した遺物は、Ⅲ~V期の弥生土器である。なお、V様式系の甕が含まれている可能性はある。よって、木製扉の廃棄時期は、弥生時代中期中葉~古墳時代初頭の幅が考えられる。下層の黒色系砂からはIV期の壺(136)が出土し、他に櫛描直線文や櫛描縞状文が施された壺の破片も出土している。ただ、外面タキメのある壺の破片2点も出土しているので、下層はIV期に堆積が始まり、V期までの間に埋没したといえる。したがって、その上面で出土した木製扉はV期に投棄された可能性が高い。



第24図 002自然河道出土遺物実測図



第25図 002自然河道平面図・土層図

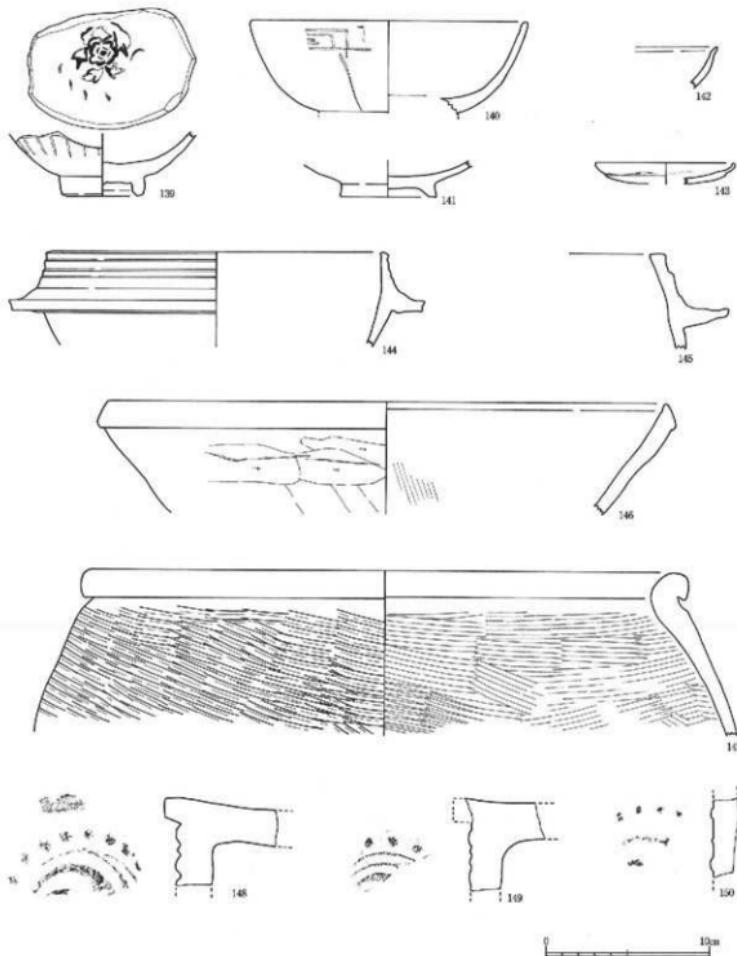


第26図 002 自然河道出土木製扉実測図

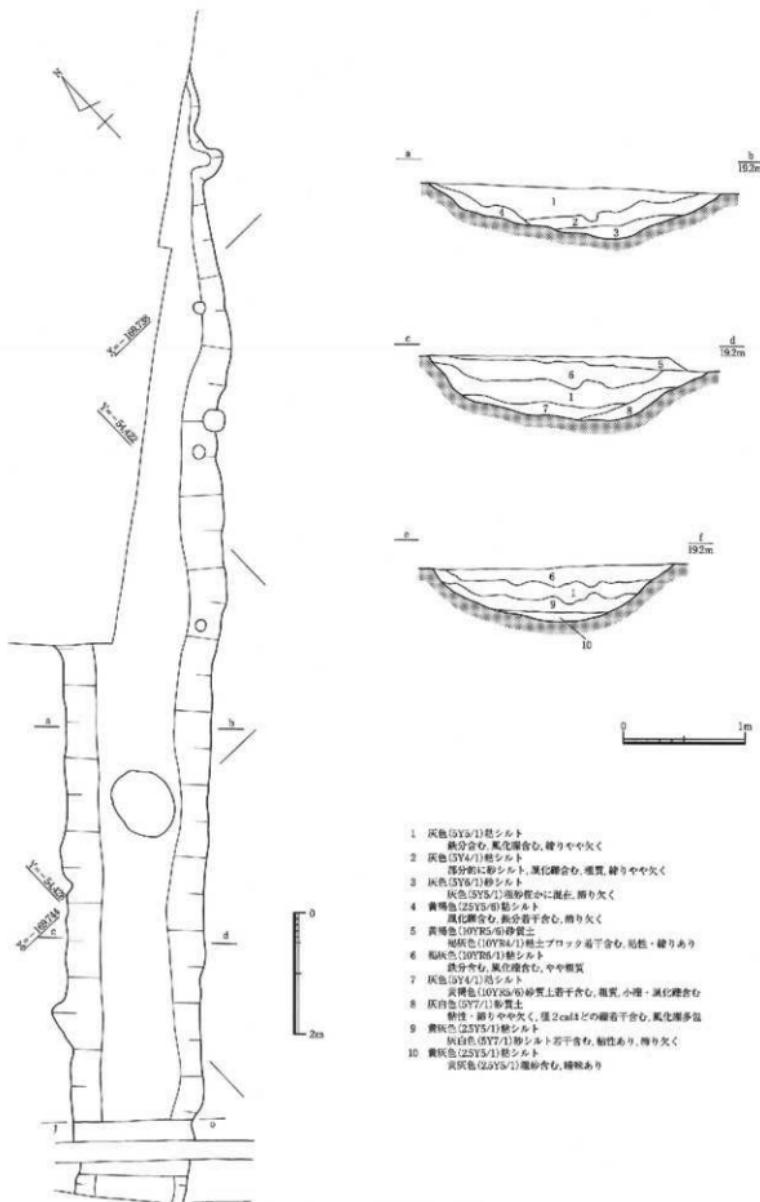
(3) 030溝

17mにわたって検出した、北東—南西方向の溝である。幅は2.0~2.4m、深さは0.4~0.5mを測る。

検出された範囲ではほぼ直線を呈しているが、現状の北東端から5mほどの範囲においては、僅かに北に方向を変えつつあるように観察される。緩やかに屈曲したのち、北流するのではなかろうか。



第27図 030溝出土遺物実測図



第28図 030満平面図・土層図

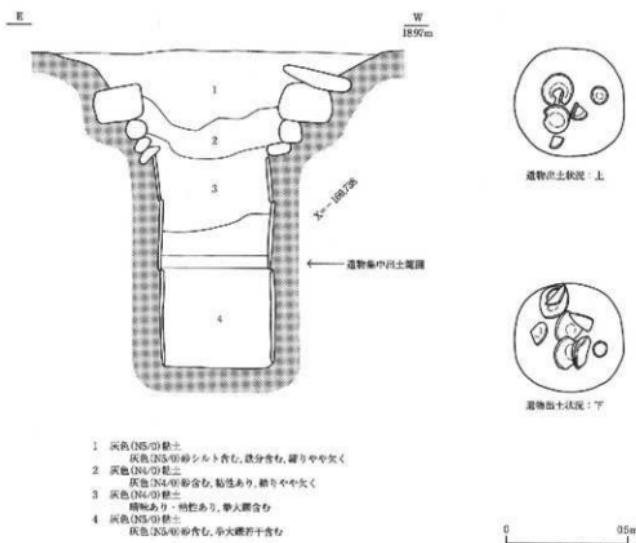
溝の断面は緩やかな椀状を呈していて、明瞭な段掘りはみられない。底面上の一部に砂質土が認められるが、堆積土の主体は1層（灰色粘シルト）・6層（褐灰色粘シルト）であり、これらも含め粘シルトが大半を占めている。水量の乏しい状況が続いているのではないかと推測される。また砂シルト・砂質土も含まれているが、それは溝底上、あるいは現状の最上部でのみ認められる。したがって、砂の流入は一過的であったといえる。なお堆積土の状況から、自然堆積により埋没したとみられる。

出土遺物は多い。古墳時代の須恵器や土師器の甕・瓦器椀・皿もみられる。ただし、多くは15～16世紀のもので、瓦質土器（捏鉢・火舎・羽釜・在地甕）、陶器（甕・捕鉢・碗）、土師質土器（鍋・捏鉢・土釜）が認められる。また青磁や白磁も、小破片ながら存在する。

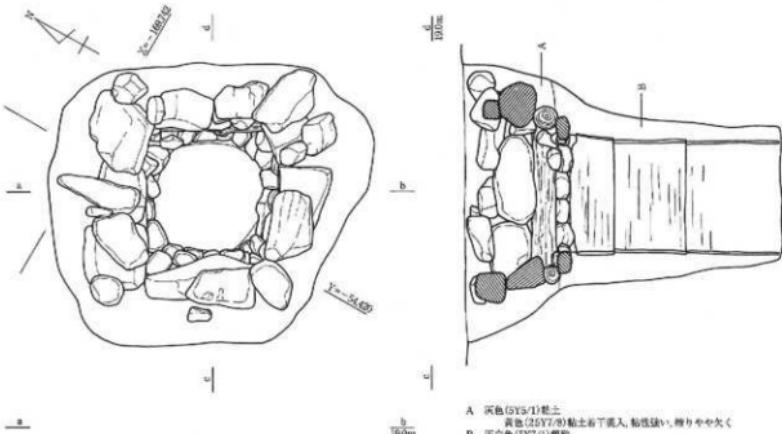
瓦質の羽釜は、2点掲載した。そのうち1点（145）は、小破片であるが、口縁部が内傾し、胴部に丸味がありそうである。それに対して他の1点（144）は、口縁部が直立するとともに多段化が著しい。胴部には張りがない。よって、後者は16世紀代に位置付くと考えられる。同時期のものには、瓦質の在地甕（147）もある。

土師質土器の捏鉢（146）は、15世紀代初頭あるいは14世紀末まで遡る可能性がある。15世紀代に位置付けられるものには、先の羽釜のうちの1点（145）もある。瓦器の椀や皿は、さらに時期が遡り、12世紀後葉に比定できよう。

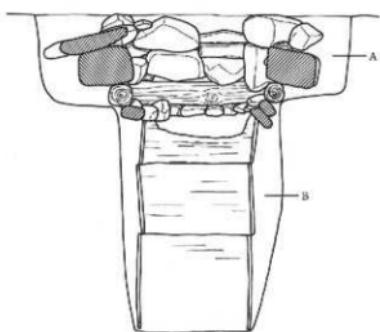
この溝から出土した遺物の時期幅は長いが、埋没は15～16世紀と考えられる。



第29図 028井戸土層図



A 深色(GY5/1)粘土  
黄色(2SY7/6)粘土若干混入、粘性強い、握りや欠く  
B 淡白色(GY7/1)砂  
明黄色(OYR7/6)砂若干含む、握りや欠く

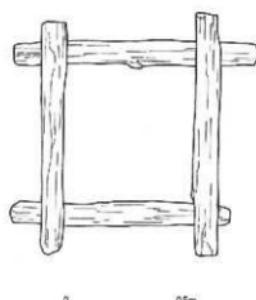


#### (4) 028井戸

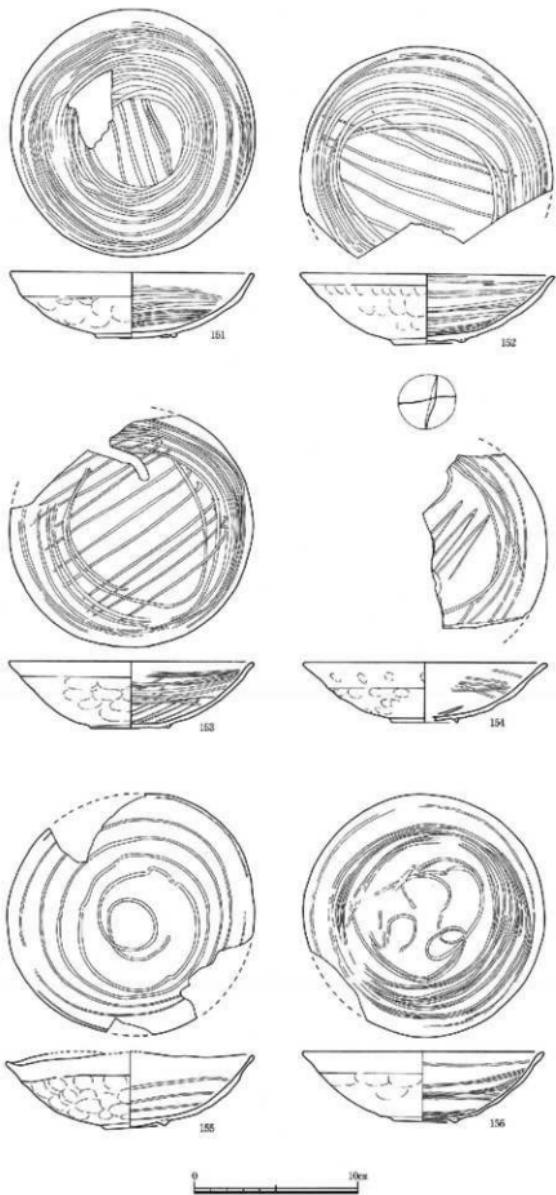
比較的の遺存状況のよい井戸である。構造は、井桁と井筒に分かれる。井桁は現状0.4m、井筒は0.9mの高さがあり、検出面下1.3mで井戸底になる。底面付近では著しい湧水があった。調査終了段階で全体を半裁して、掘方や底部の状況を確認した。

井桁部分は1辺1.1~1.2m程度の方形の掘方を設け、井筒部分を掘り込んだ肩部に径10cm程の縦を井筒外形に合わせて円形に1段巡らせる。それが上部構造の緩衝材の役割をすると考えられる。その上に径10cmの丸太材を井桁状に組むことで、方形の枠組の基礎部分となる。

丸太材は、上段材の下辺を若干抉り込んで噛合せをよくしている。この丸



第30図 028井戸平面図・立面図

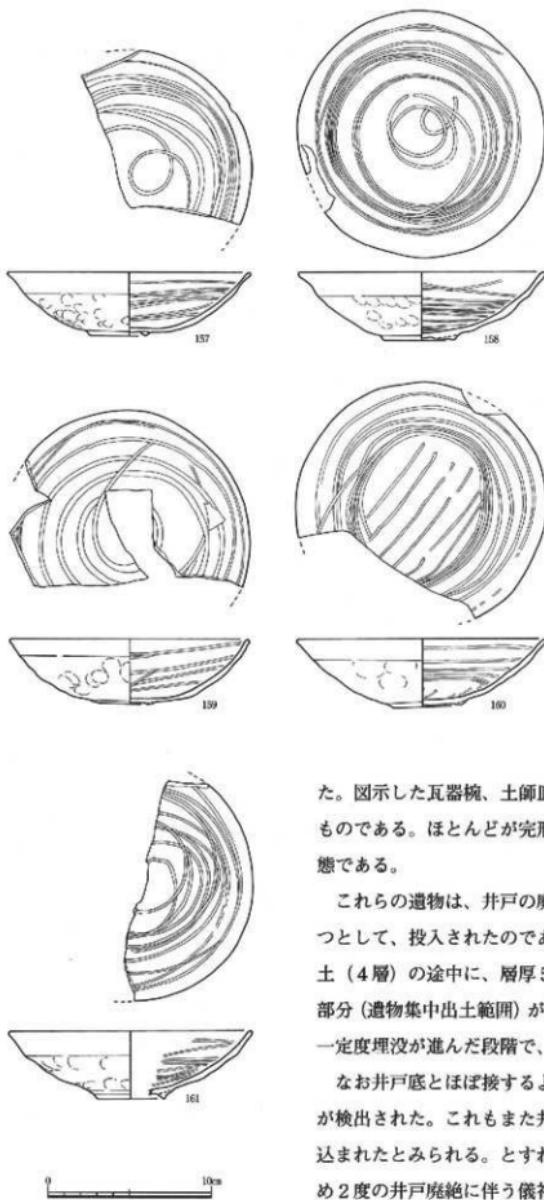


第31図 028井戸出土遺物実測図（1）

太材の上に長径20~30cm程の角縁を2段、小口積みあるいは平積みにしている。背後には灰色粘土を用いて裏込めをしている。粘性はあるが、締りをやや欠いている。

井筒は、曲物を3段積み上げて構成している。材厚は1~2cm程と薄い。曲物の積み方は、多くの例と同じで、口径の広い側を下に向けた「ハ」字状に設置しているが、口径の広狭差がほとんどないので、端部はほとんど合口の状態であった。曲物には、地下水の流入を高めるための貫孔は穿たれていなかった。井筒と掘方との間には灰白色粗砂が充填されていた。粗砂を用いたのは、地下水の浸透を高めるためと考えられる。

井戸内の堆積土は4層に分かれるが、いずれも灰色系の粘土である。流入土や縁の包含量によって細分したが、基本的には同質土



第32図 028 井戸出土遺物実測図（2）

である。後述するように、4層上の途中で遺物が多量に出土したが、その上下では層の差異は認められなかつた。よって、これらの堆積土は比較的短期間のうちに形成された可能性が高い。ただし、堆積土には不整合な状況が認められないことから、人為的な埋め戻しとは考えがたい。

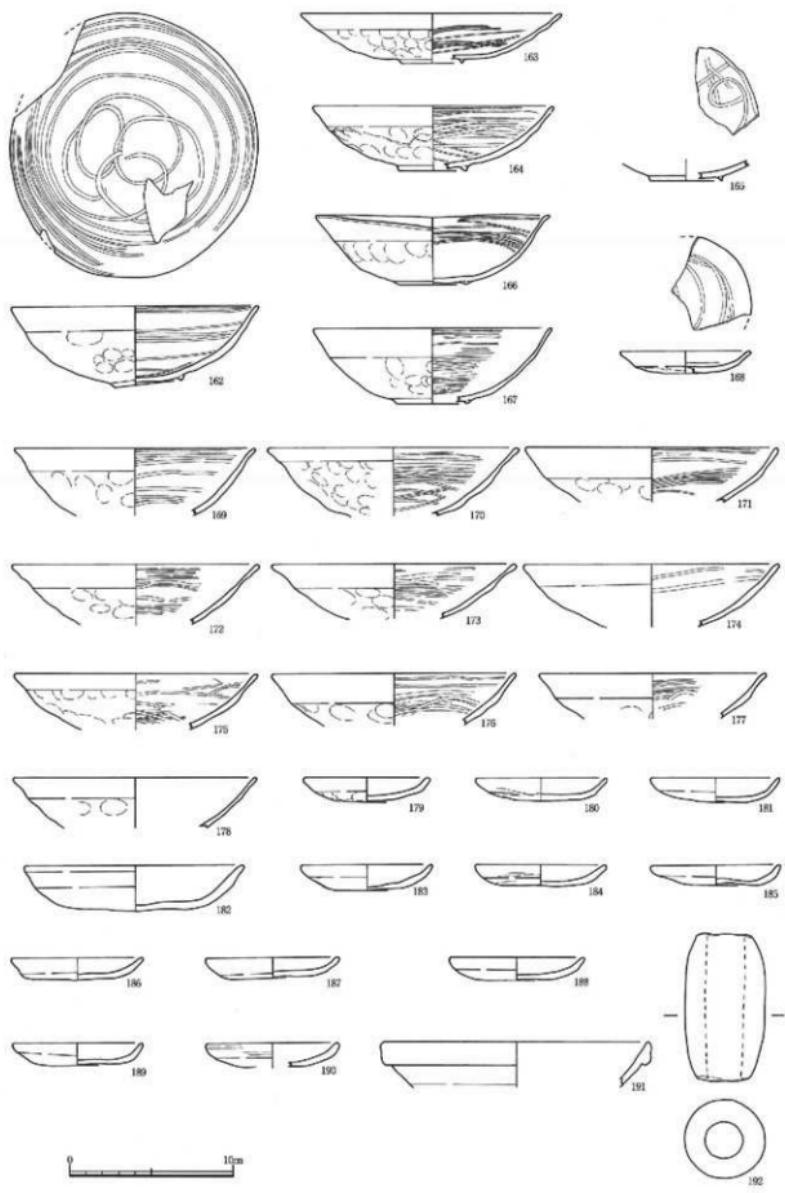
底面上の0.4~0.5m間に遺物が集中して出土した。主に瓦器碗と土師皿である。白磁碗の破片と大型土錐も各1点含まれていた。調査時に出土状況を図化しただけでも15点あつ

た。図示した瓦器碗、土師皿は全てこの集中出土範囲のものである。ほとんどが完形品、あるいはそれに近い状態である。

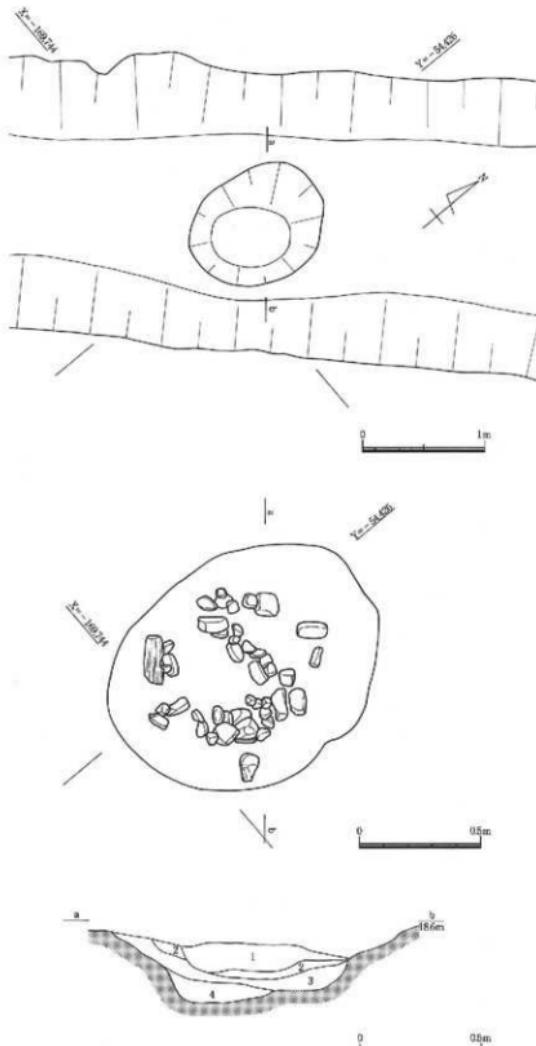
これらの遺物は、井戸の廃棄時に祭祀的な行為のひとつとして、投入されたのであろう。しかもひとつの堆積土（4層）の途中に、層厚5~10cm程の遺物の集中した部分（遺物集中出土範囲）が挟み込まれていることから、一定程度埋没が進んだ段階で、投棄したと考えられる。

なお井戸底とほぼ接するように径30~40cmの平らな礫が検出された。これもまた井戸の廃絶時に意図的に投げ込まれたとみられる。とすれば、瓦器碗などの投入を含め2度の井戸廃絶に伴う儀礼があったと考えられる。

この井戸の埋没は13世紀前葉といえる。



第33図 O28井戸出土遺物実測図（3）



### (5) 036井戸

030溝の底面で検出された井戸の最下部である。深さ0.2mが残存していたに過ぎないが、底部からの湧水は著しい。標高T.P.18.3mを測る。なお028井戸の底部標高はT.P.17.6mであった。

平面形は南北1.15m、東西0.9mを測り、やや不整な円形を呈している。井戸枠は認められないが、本来素掘りであったか、井戸枠があったのかは、遺存状態の悪さから不明である。

底面上で礫および1点の木片がみられたが、遺物の存在はまったく認められなかつた。したがって廃棄年代は明らかにできないが、030溝検出時にこの井戸の掘方を確認できなかつたことから030溝より先行する。030溝は15～16世紀に埋没したと考えられるので、井戸はそれ以前のものであり、推測を重ねねば028井戸と同時期に機能・埋没した可能性もある。

堆積土は、最下部の青灰色砂を除くと灰色粘土である。この点も028井戸と共通する。

上述のように、最下部には拳大の礫が散乱していた。ところが、030溝の覆土中には

- 1 灰色(N86/0)粘土  
青灰色(108G7/1)粘土ブロック若干含む、粘性強い、鉄分含む、硬り欠く
- 2 黄褐色(108G7/1)粘土  
砂利塊、砂利欠く
- 3 棕色(5YS7/1)粘土  
灰岩(5YS7/1)細砂含む、風化礫若干含む
- 4 青灰色(10K6/1)砂  
海藻若干含む、風質

第34図 036井戸平面図・土層図

そうした疊は含まれていなかった。したがって、疊はこの036井戸にのみ含まれるものといえる。とすれば、井戸の廃絶時に疊を投げ入れた可能性が考えられる。

なお、この井戸が028井戸と同時期とすれば、平安時代末～鎌倉時代前葉にこの地点一帯の開発が進められたと考えられる。

#### (6) 016溝

長さ5.5mにわたって検出した、幅0.6～0.7m、深さ0.3m程の小溝である。検出した範囲では、ほぼ直線である。南北方向に主軸をとるが、やや北西～南東方向気味である。

北は調査区外に伸び出している。一方、南は近代の粘土探掘跡とみられる017落込みに切り込まれ、調査区北西辺より5.5m以南では存在が認められない。したがって現状の南端が本来的に端部であったか、それとも017落込みにより消滅したのかは不明である。

堆積土は、上層の砂質土（1・2層）と下層のシルト系土（3～5層）に分かれる。現状では砂質土の部分が僅かではあるが、上面の削平を考えると逆に下層のシルト系土の堆積が溝全体の中では部分的であったと考えられる。

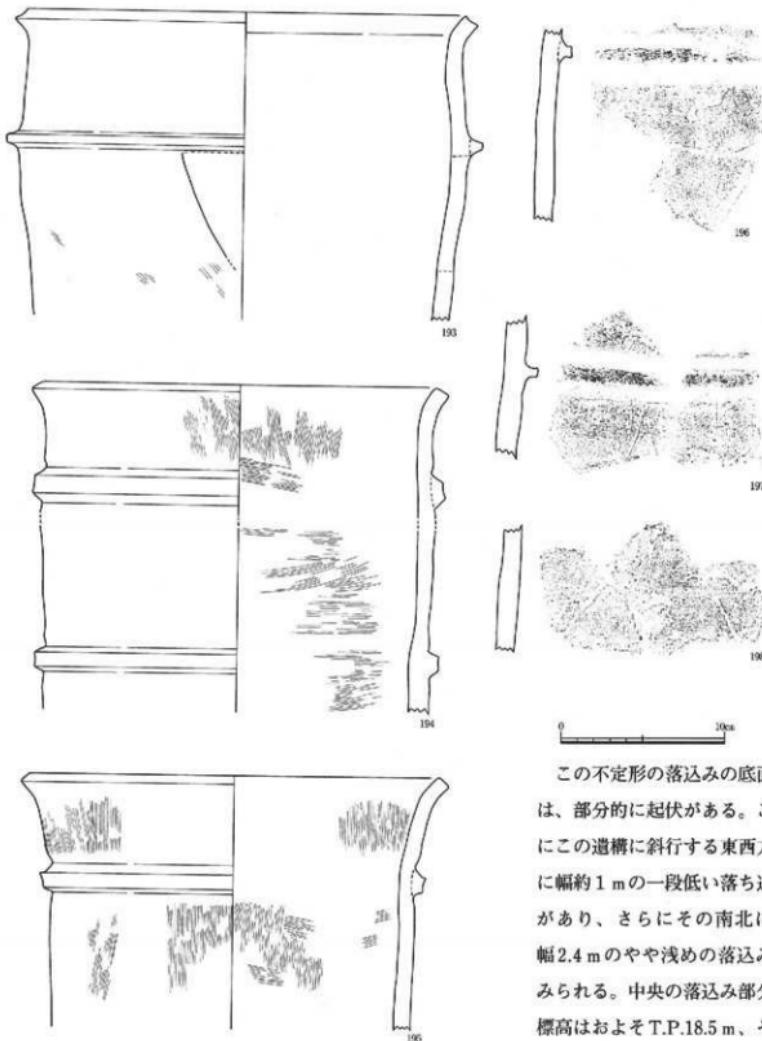
遺物は土器の小破片4点が出土したのみなので、遺物からこの溝の年代を求ることはできない。しかし、15～16世紀代に埋没した030溝とほぼ直交する方向に主軸をとる。軸方向の関連性があるとすれば、030溝と同一時期の可能性がある。平安時代末～鎌倉時代前葉頃の開発に続き、この付近では15～16世紀にも一帯が改変されたと考えられる。



第35図 016溝平面図・土層図

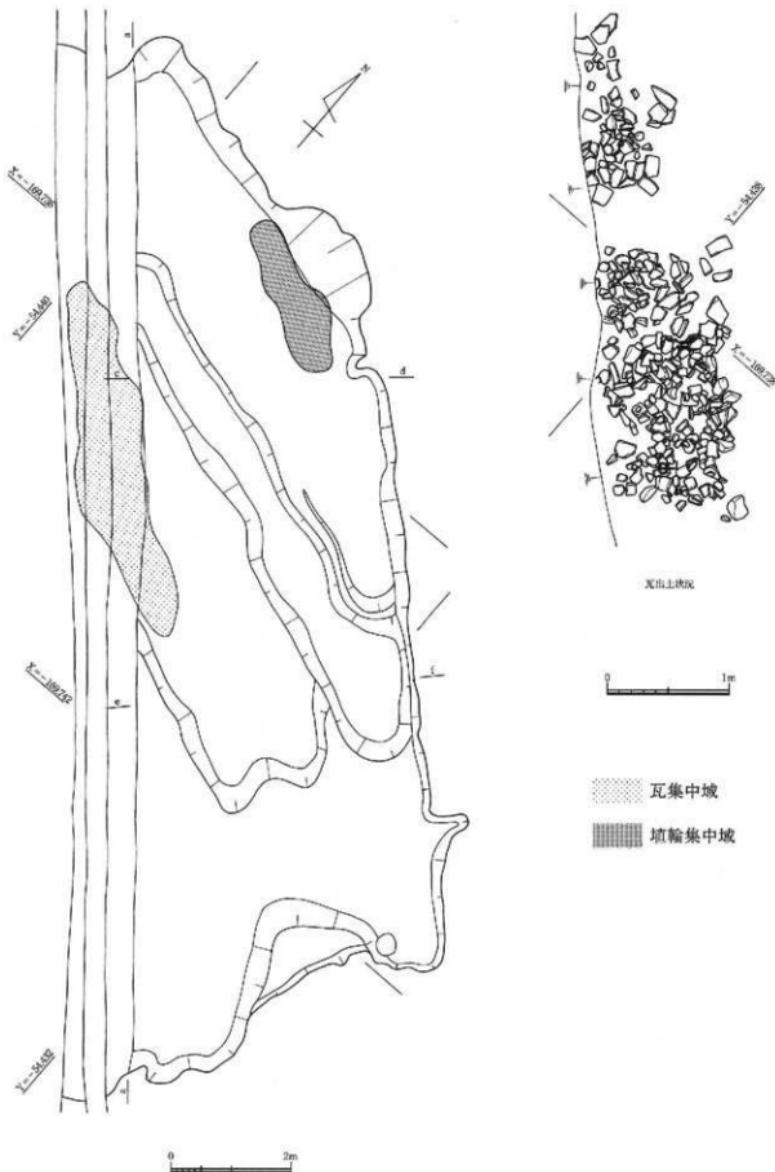
(7) 034落込み

最大長17mにわたって検出した不定形の落込みである。南西側が調査区外に伸び出しているため、全体の形状や規模は不明である。がしかし、現状の形状から推測すると、遺構の真半分を検出しているようである。とすれば、幅は8.8m程となる。

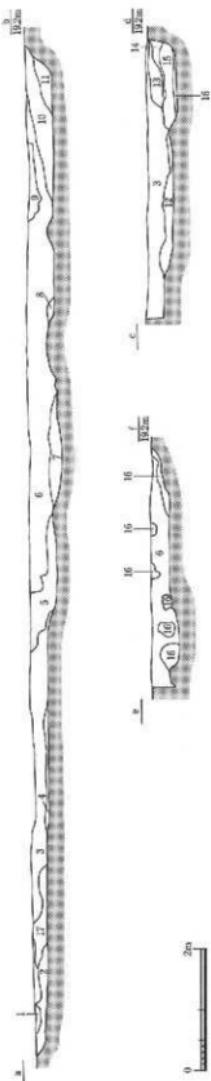


第36図 034落込み出土遺物実測図(1)

この不定形の落込みの底面には、部分的に起伏がある。ことにこの遺構に斜行する東西方方向に幅約1mの一段低い落ち込みがあり、さらにその南北にも幅2.4mのやや浅めの落ち込みがみられる。中央の落ち込み部分の標高はおよそT.P.18.5m、それに対して北の落ち込みはT.P.18.7



第37図 O34落込み平面図・瓦集中域平面図



- 1 明黄色粘シルト (10Y7R4/2) 砂質土混含、風化層含む、縫りあり、人為堆積  
灰色 (7N5/0) 砂上ブロック、風化層含む、縫りあり、人為堆積
- 2 暗青褐色粘シルト (10Y7R4/2) 砂質土  
灰色 (7N5/0) 砂土ブロック含む、縫りあり、人為堆積
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土  
灰色 (7N5/0) 砂土ブロック含む、縫りあり、人為堆積
- 4 後黄色 (25Y7/6) 粘シルト  
3層で層かたちは、縫りなく、礫山土の再堆積か
- 5 にぶい黄褐色 (25Y7/6) 粘シルト  
灰色 (7N5/0) 砂土ブロック含む
- 6 にぶい黄褐色 (10YR5/6) 砂質土  
灰色 (7N5/0) 砂土、羽黄褐色 (10YR6/6) 粘シルト層かに混入、後3cmほど縛着干含む
- 7 にぶい黄褐色 (25Y7/6) 砂シルト  
粘性あり、縫りなく、瓦葉量に含む
- 8 にぶい黄褐色 (25Y7/6) 粘土  
粘性強い、風化層若干含む、縫りなく
- 9 にぶい黄褐色 (25Y7/6) 砂質土  
灰色 (7N5/0) 砂土ブロック含む
- 10 にぶい黄褐色 (25Y7/6) 粘シルト  
灰褐色 (25Y7/2) 砂シルトブロック、灰色 (7N5/0) 粘シルトブロック若干含む、縫りなく  
11 にぶい黄褐色 (10YR5/6) 粘シルト  
同色の粗砂含む、縫りなく、灰褐色 (7Y5/1) 灰色粘シルトブロック若干含む
- 12 灰オリーブ (5Y6/4) 粘シルト  
灰褐色 (5Y5/1) 粘シルトブロック、明黄色 (25Y7/6) 粘シルト若干含む、粗粒、縫りなく
- 13 にぶい黄褐色 (10YR5/6) 砂質土  
縫りなく、縛りあり、風化層多量
- 14 灰褐色 (5Y5/1) 粘シルト  
粘性欠く、縛りややあり、散分含む
- 15 硅褐色 (10Y7R4/6) 砂質土  
粗粒、縛りあり、風化層含む
- 16 秋褐色 (NS) 粘シルト  
青褐色 (10YR5/6) 砂質土含む、無分含む
- 17 黄褐色 (5Y5/1) 粘シルト  
灰褐色 (5Y5/1) 粘シルト  
18 灰褐色 (10Y7R4/6) 砂質土  
縛りややあり、風化層含む

m、南の落込みはT.P.18.6 mであり、見掛けよりも実際の起伏はさほど著しくない。とはいえ、6 m程の範囲がこの034落込みの中で一段下がることに違はない。

堆積土は砂・粘シルトおよび砂質土である。大半を占めるのは、にぶい黄褐色砂質土（3層）と同色の粗砂（6層）で、両層の間にある5層が3層を切り込むように堆積している。全体の状況からすると、1~4・12~15・17層が先行して堆積し、その一部を掘り込んだ中に5~11・16・18層が堆積したようである。そして、この後出的な堆積土は、上述の落込み内で一段下がった範囲と対応している。

堆積土のうち6層には、人頭大の灰色粘シルトのブロックが散在する部分がある。おそらく6層は人為的に埋め戻されたものと考えられる。このように、人為的に埋め戻された部分も少なからずある。

この遺構では2箇所注目される。ひとつは長さ2.7 mの範囲で埴輪片がまとまって出土した箇所である。いまひとつは長さ6 mにわたって、細かく碎かれた瓦片が検出された箇所で、調査区外まで延びている。暗渠の可能性が高い。

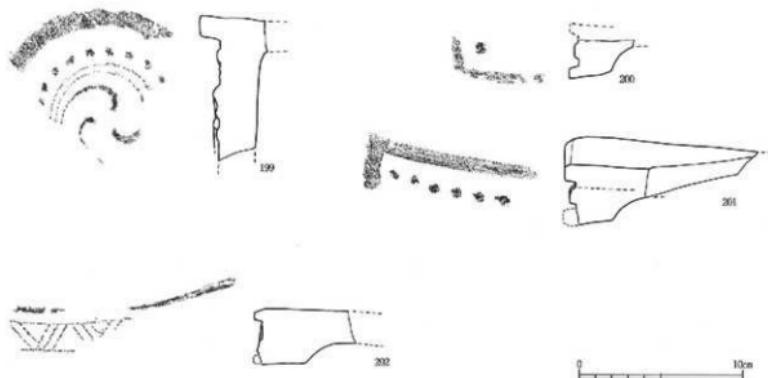
第38図 034落込み土層図

埴輪片の集中出土域は、落込みの北辺で検出された。長さ2.6m、幅0.8mの梢円形を呈する範囲から、復元実測可能な破片3点、拓影掲示可能な破片3点、その他小破片数点が出土した。検出時に立った状態のものがあり、この落込みが埋没古墳の周溝である可能性も予想した。しかし、埴輪の掘方は確認できず、しかもいずれの埴輪片も6層中に包含されていることから、埴輪片は近在地にまとめて包含されていたものが、土中に混入されたまま034落込み内に再度埋め込まれたと考えられる。

瓦片の集中出土範囲は、埴輪集中域の南約3mにある。その範囲は、現状で長さ6m、幅1.2mを測るが、南西辺は調査区外にあるため、全形は不明である。瓦片は1辺10cm程度に小割されたものが主流を占めている。瓦片の中には拳大の礫や須恵器（甕）、瓦器（椀）、土師質土器（捏鉢、土釜）、瓦質土器（火舍、捏鉢、羽釜、在地甕）、焼締陶器（甕）なども混じるが、点数は少なく、瓦以外に図示できたものはない。

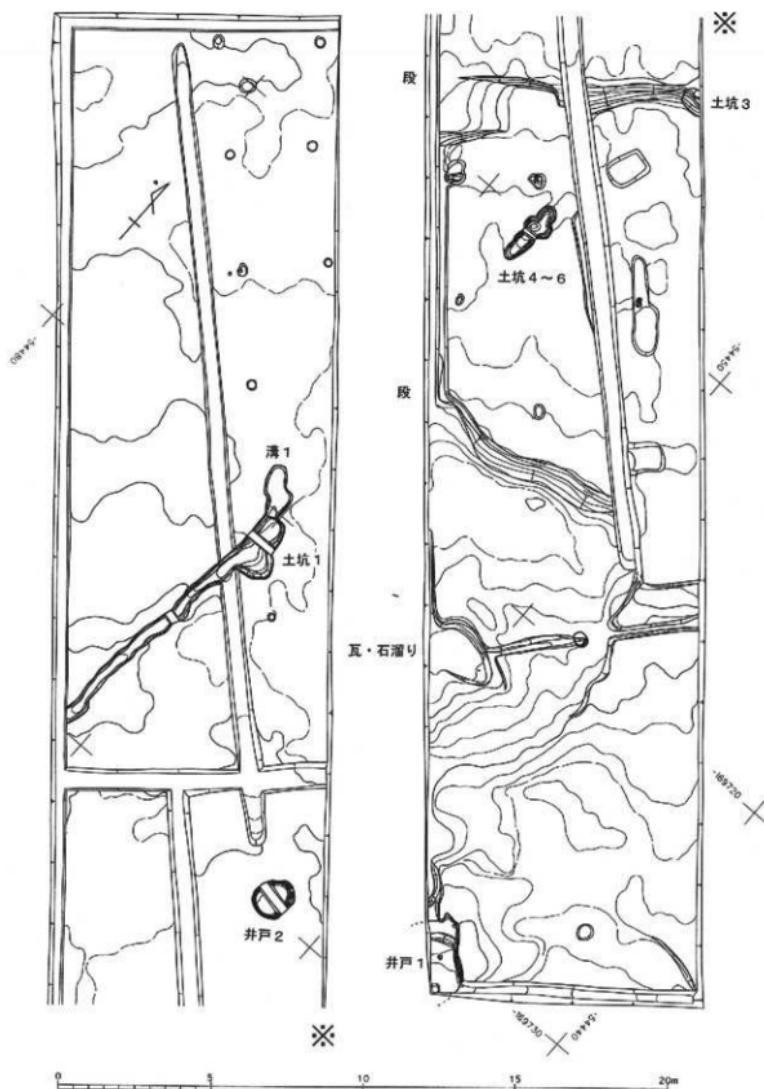
埴輪片や瓦片の集中域を除いた堆積土からも、古墳時代の須恵器甕や黒色土器、瓦器椀、陶器甕、土師質土器（羽釜・捏鉢・鍋・在地甕）、瓦質土器（羽釜・捏鉢・在地甕）などが出土した。多くは15～16世紀代の遺物であるが、染付磁器も少量ながら存在している。上部を覆う盛土から混入した可能性も否定できないが、ひとまずは034落込みに伴うものと捉え、この落込みの没時期を近世以降に求め、それ以前の時期・時代の遺物を包含する近在の土を利用して掘方内を埋めたと考えておく。そしてこの034落込みは、当該地周辺にも類例のある粘土採掘のための掘方だと考える。

なお出土した円筒埴輪は、口径がおよそ26～28cmの小型品である。口縁部下第2突帯までは1次タテハケのみ認められるが、拓影資料にはヨコハケが施されたものもある。口縁部と第1突帯間は短く、透孔は三角形である。明らかに前期の埴輪である。



第39図 034落込み出土遺物実測図(2)

第3節 平成17年度の調査



第40図 空洞平面図

## 1. 調査方法

平成16年度に続き、府営岸和田下池田住宅建替え工事に伴う発掘調査を実施した。本年度の調査区は、外周道路の残り部分(567m)と仮設集会所部分(22m)である。地表下0.9mまでを機械・人力掘削し、記録保存の措置を施した。

## 2. 調査結果

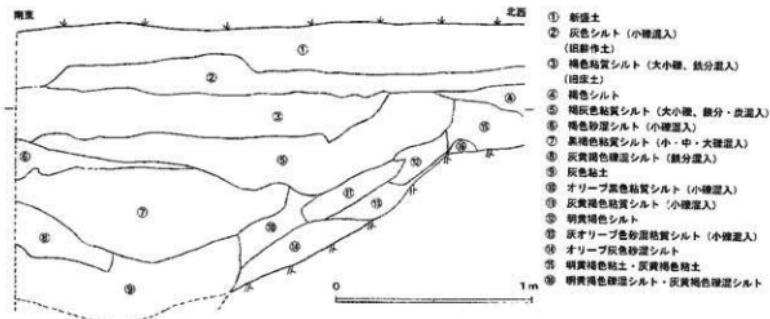
《外周道路》 長さ63m幅9mの長方形の調査区である。厚さ40~60cmの新盛土の下に、旧の耕土層・床土層がある。床土層の下は、薄い遺物包含層が部分的に存在するのみで、ほとんどは即地山か高台部分を除いては、自然河川であった。

調査区の南東寄りの部分では、幅12~13mにわたって、高台部分があり、その部分からは、古い時代の遺構が検出された。調査区の北西部および南東部分は、後世の田園造成により、削平を受けていたらしく、削り残された遺構や新しい時期の遺構しか検出されなかった。

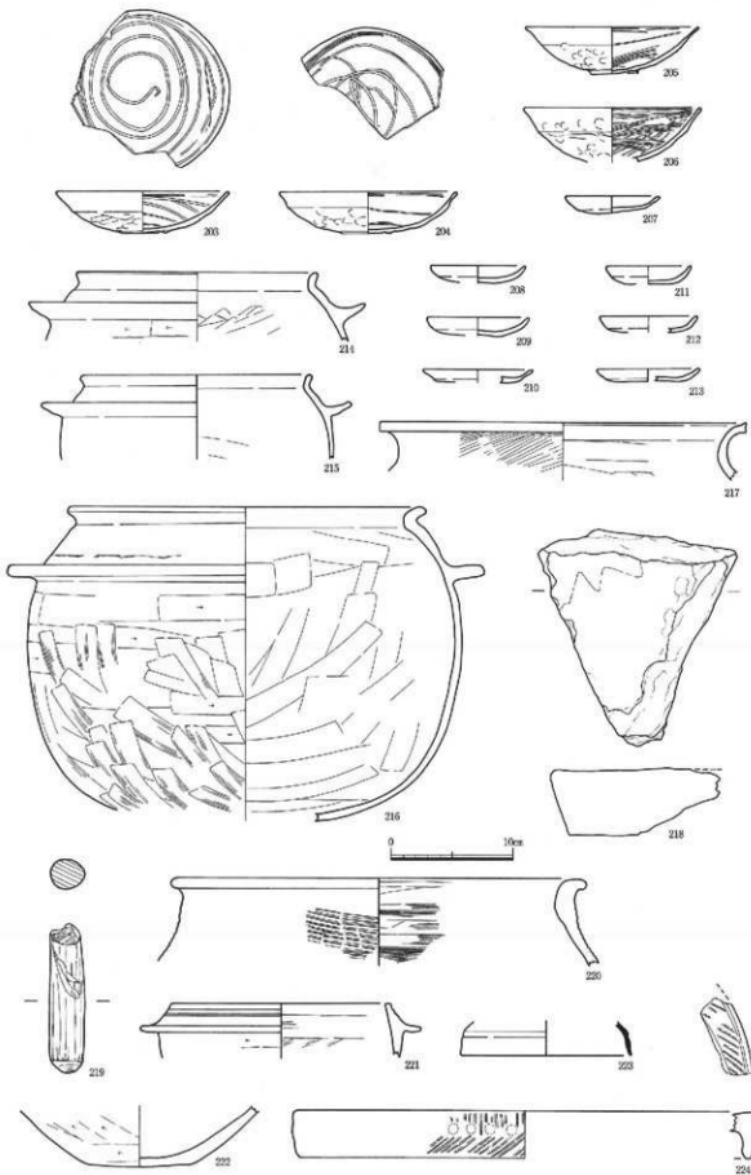
調査区の北西部から検出された遺構には、溝1・土坑2・井戸2などがあった。溝1は、長さ11mにわたって検出された幅40cm深さ15cmのもので、埋土は砂混じりの灰色シルトであった。磁北にほぼ合わせ、直線的に掘られていたが、北端は、土坑1に切られていた。土坑1は、長さ2.1m、深さ15cmの歪んだ楕円形土坑で、埋土である灰オリーブ色シルト層から中世の平瓦片と土師器片が出土した。

井戸2は、旧耕土層の直下で検出されたもので、径1.2~1.5mの楕円形を呈し、素掘りであった。底は、2.5mまで掘削したが、湧水が激しく、底を確認できなかった。埋土中から遺物は出土せず、時期不明であった。

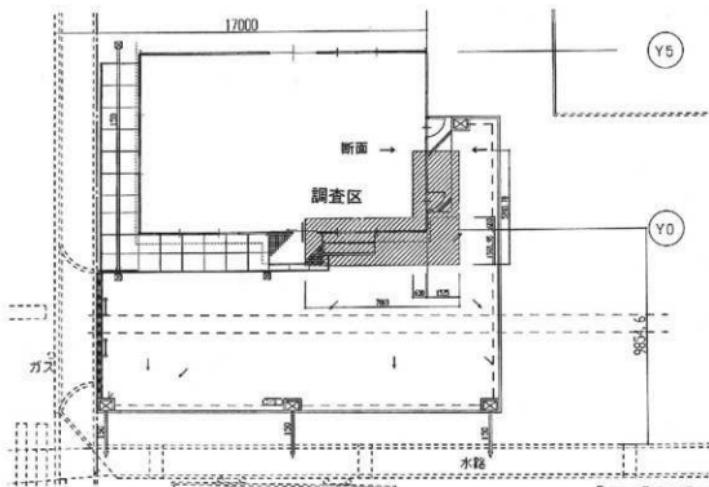
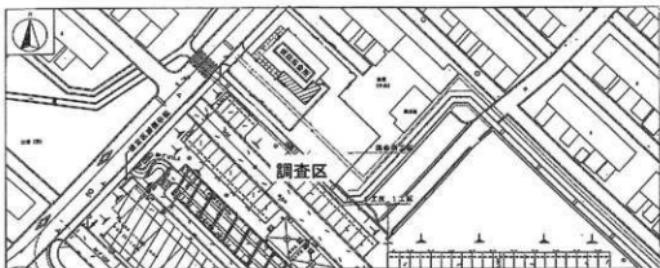
なお、調査区北西部は、調査区西端から東に11mの箇所で、灰緑色粘土層の地山が自然河川によって切られていた。その深さ20~30cmの自然河川を掘削すると、灰色砂層中に含まれた黒色シルトブロック土より、古墳時代後期の須恵器杯蓋片が1点出土した。あまり磨滅していないの



第41図 井戸1断面図



第42図 出土遺物実測図



北 南

茶褐色砂礫土層（新盛土）

黄茶褐色粘土層（新盛土）

黒灰色粘質土層（旧耕土）

灰色砂礫層（自然河川）

緑褐色砂礫層（地山、非常に固い）

0 30cm

で、近くにその時期の遺構のあることが推定された。他に遺物は出土せず、灰色の砂礫が堆積しているのみであった。

調査区の南東寄りの部分で検出された高台の上の遺構には、埋土が黒褐色シルトの土坑が4基あった。土坑4～6は南北に並んで検出された。南側の土坑4は、不整形な楕円形土坑で、埋土中から弥生土器の細片1点が出土した。他の土坑から遺物は出土しなかった。

高台の北西側の落ち部分、高さ30cmほどの段の肩

第43図 仮設集会所位置図・断面図

部から検出された土坑3は、長さ1m以上、深さ35cmの楕円形土坑で、埋土は黒褐色シルトであった。遺物は出土せず、時期の特定はできないが、他の中世の遺構埋土と異なり、土坑4~6と同様の固く締まった黒褐色シルトであったので、恐らく弥生時代の遺構と推定された。

調査区の南東部分からは、中世以降の落ち込みと井戸が各1基、検出された。落ち込みは、なだらかに径5mほどの部分が半円形に深さ25cmほど落ち込んでいたもので、内部に瓦片や石がかたまって出土した。南北朝時代の瓦質甕やすり鉢片も出土したことから、その時期に投棄されたものと判明した。

井戸1は、調査区の南西角に半分だけが検出されたもので、推定幅2.6m以上の方形・素掘りのもので、埋土中から、多数の鎌倉時代後期の瓦器楕・土師器小皿・東播甕のほか、断面に煤が付着した瓦片や長さ18cm厚さ5cmの紅縞片岩石材・繪製の曲物桶片なども出土した。土師器羽釜は、ほとんど完形になるもので、他の遺物と一緒に投棄されたものと考えられた。井戸の底は、湧水と調査区外に影響が出るため、掘削確認できなかった。焼けた瓦や焼石が出土したため、近くにその時期の寺の存在が推定された。

なお、調査区内の薄い遺物包含層から出土した遺物には、弥生中期の帯口縁部や弥生後期の生駒西麓産の甕・中世の瓦質羽釜などがあった。

《仮設集会所》 長辺の長さ7.1m、短辺の長さ3.1m、幅2.2mのL字形の調査区である。厚さ1mの新盛土の下に旧の耕土層があって、その下が即地山であった。地山は、緑褐色砂礫層で、非常に固かった。地山直上に時期不明の土器片が4点、鉄器（釘？）が1点出土したのみで、搅乱の溝以外に、遺構は検出されなかった。地山直上には、灰色砂礫層が厚さ5~10cmほど堆積していた。時期不明の洪水砂層と考えられた。

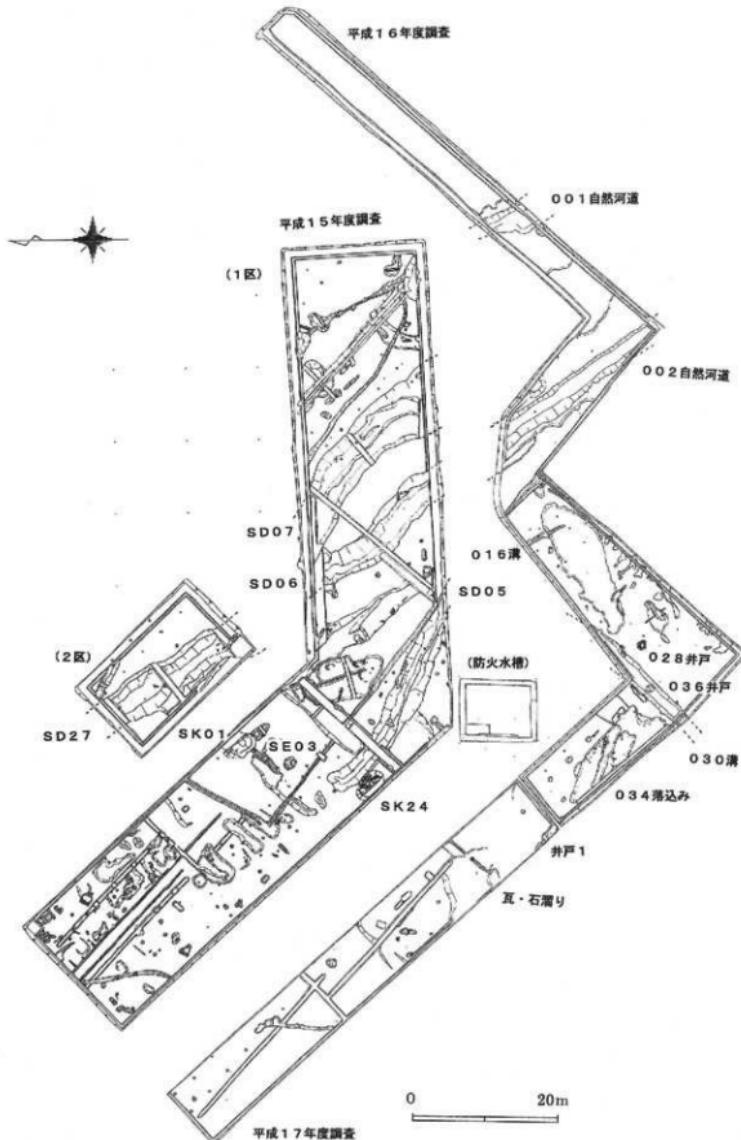
### 3. 小結

- ・ 弥生時代と推定された土坑が4基検出された。他にその時代の遺構ではなく、遺物も包含層中から少量出土したのみで、集落域の縁辺部に当たると考えられた。
- ・ 古墳時代後期の自然河川が検出された。
- ・ 鎌倉時代後期の井戸が検出された。土器や瓦などが多数埋められていた。
- ・ 南北朝時代の瓦・石溜りが検出された。近くにその時代の寺の存在が推定された。
- ・ 近世には、田圃になっていた。

## 第4章　まとめ

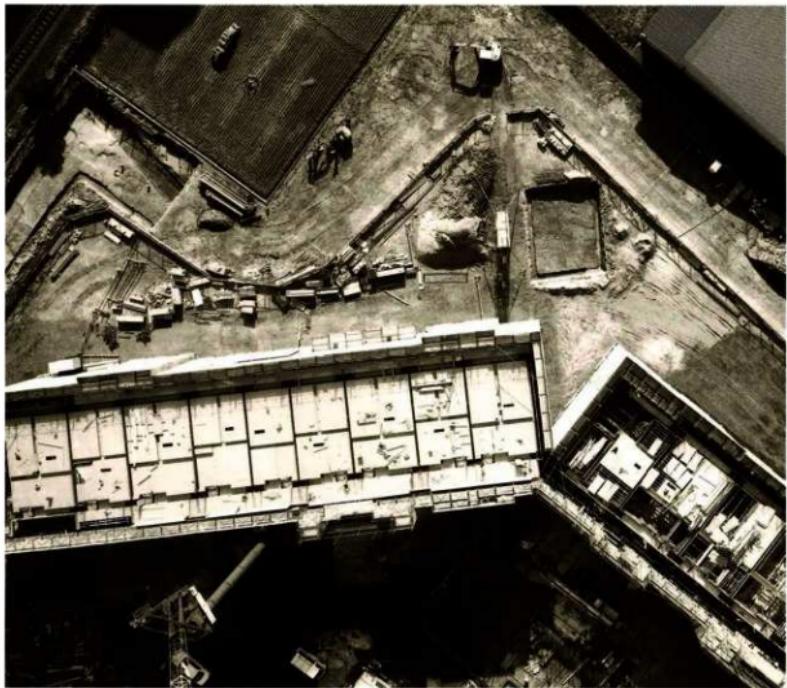
平成13年度、府営岸和田下池田住宅建替えに伴う試掘調査で、下池田遺跡の遺跡範囲が南東側に大きく拡大することが判明した。以後、平成15年度～17年度にわたり、建設工事に先立って、計4,308m<sup>2</sup>を発掘調査した。その結果、当初の予想に反して、各時代にわたって、多数の遺構・遺物が発見された。

1. 単独の出土だが、縄文時代前期と考えられる、外面が著しく灰白色に風化したサヌカイト製縦型石匙が出土した。弥生時代前期のサヌカイト製回基式石鎌も出土した。
2. 弥生時代中期後半の土器が、SD06、SD07、SD27、河道2から出土した。底部穿孔の壺もあったことから、墓への供獻土器もあったことが判明した。弥生時代後期の土器が、SD07や河道1から出土した。流路跡からの出土のため、調査区南東の上流域から流されてきたものと考えられた。マダコ壺や木製扉の出土が珍しかった。
3. 幅7mほどの002自然河道や幅5mほどの001自然河道、幅5mほどのSD06やSD07、SD27は、それぞれ、調査区の南東から北西へと流れていた自然流路である。弥生時代中期・後期の遺物を含むことから、その時期に存在したことは明らかだが、あまり蛇行せず、向きがほぼ一定なことから、用水路として、あるいは人の手により掘削された可能性も考えられた。
4. 古墳時代前期の有黒斑の円筒埴輪が034落込みからまとまって出土した。円筒棺に使用されていたものか、この落込みが古墳周溝に当るものなのか、色々考えられたが、珍しい資料であった。
5. 古墳・奈良・平安時代の遺物は少なかった。ただ、SD06出土の須恵器杯の裏面に「阪(?)上」と墨書きされていた資料や転用鏡、縁軸皿も出土していることからすると、近くに官衙遺構のあったことも推定された。
6. 鎌倉時代の遺構は、井戸1、028井戸、SE03などの井戸である。瓦器や中世土器などが多数出土した。焼けた瓦も多数出土していることから、近くに寺跡の存在が推定された。焼けた紅縞片岩が珍しかった。なお、SK24出土の蓮花文軒丸瓦は、下池田遺跡の南方2.1kmに所在する重の原遺跡で同瓦が出土している(岸和田市教育委員会『岸和田の文化財写真集(市内出土瓦)Ⅴ』、昭和56年)。
7. 南北朝～室町時代の遺構は、SD05、030溝、034落込み、瓦・石溜りなどである。瓦や中世土器が多数出土した。転用中の滑石石鍋や石硯などが珍しかった。直線的な溝や落込みがあることから、すぐ近くに寺跡の存在が推定された。



第44図 遺構全体図

# 写 真 図 版



建設中の府営住宅住棟部と防火水槽調査区

図版1 平成15年度調査地全景



調査地全景（上が西北）

図版2 平成15年度1区遺構



東半部（西から）



西半部（東南から）

図版3 平成15年度1区遺構



東端（東から）



S D06・S D07全景（南から）



S D06埋土断面（南東から）



S D07埋土断面（南東から）

図版5 平成15年度1区遺構



中央部全景（東南から）



S K01埋土断面（東北から）



S E 03埋土断面（南西から）



S E 03遺物出土状況（南西から）



S E 03検出状況（南西から）



S E 03完掘状況（南西から）



S K24完掘状況（東北から）



S K24石組検出状況（東北から）

図版9 平成15年度2区全景



S D27 (東南から)



S D27 (西北から)



S D27南壁埋土断面（東南から）



S D27中央柱埋土断面（東北から）



S D27北壁埋土断面（東南から）



S D27完掘状況（西北から）



1. 調査区北東部全景（垂直）



2. 調査区南西部全景（垂直）



1.001 自然河道全景（西から）



2.002 自然河道東半全景（東から）



1. 002 自然河道西半全景（東から）



2. 002 自然河道士層断面（東から）



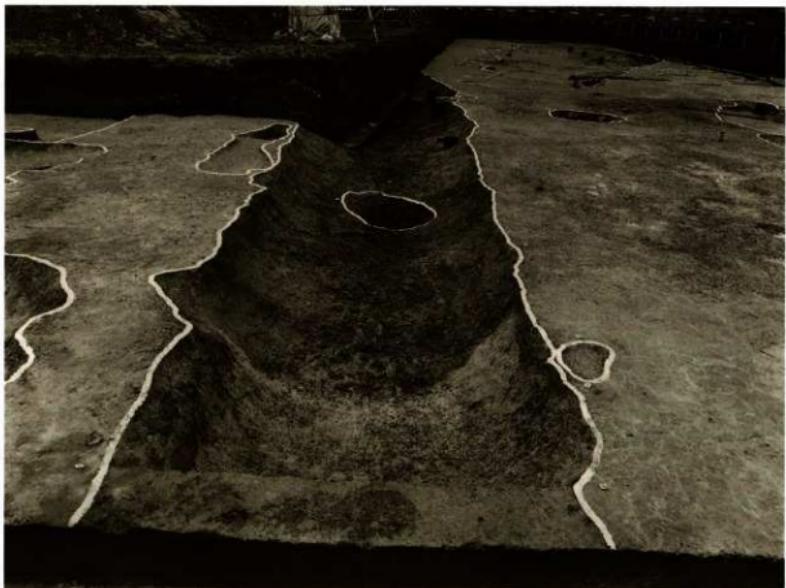
1.002 自然河道木製扉出土状況（西から）



2.002 自然河道木製扉出土状況（北から）



1.030 溝土層断面（南から）



2.030 溝全景（南から）



1. 028 井戸全景（西から）



2. 028 井戸全景（南西から）



1. 016 溝土層断面（東から）



2. 036 井戸全景（東から）



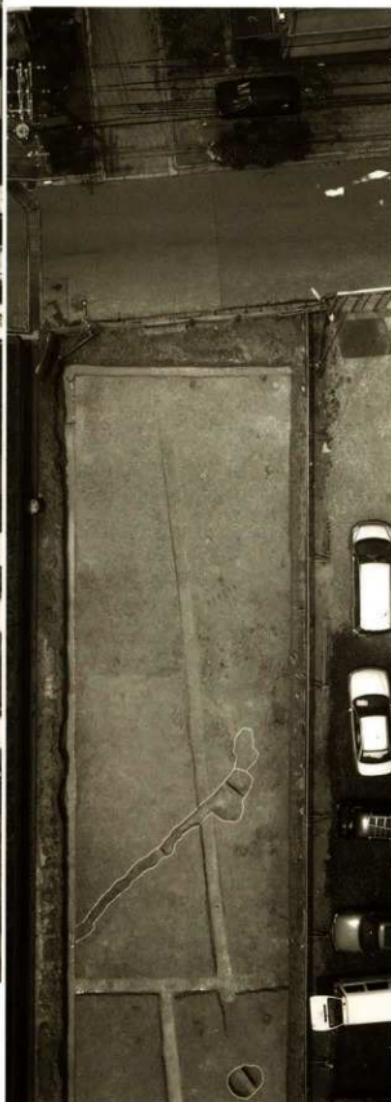
3. 034 落込み全景（左上：北東から 右上：東から  
左下：北東から 右下：東から）



a. 調査区全景（南東から）



a. 調査区全景（北西部）



b. 調査区全景（南東部）



a. 井戸2検出状況（西から）



b. 土坑3検出状況（西から）



c. 土坑4・5・6検出状況（北西から）



d. 井戸1検出状況（北東から）



e. 井戸1全景（北から）



a. 瓦・石溜り全景（北東から）



b. 瓦・石溜り（南東から）



a. 下層自然河川全景（東から）



b. 下層自然河川全景（南から）



a. 近世遺構面（南から）



b. 近世遺構面（北から）



a. 仮設集会所調査区全景（南から）



b. 仮設集会所調査区全景（北東から）



118



118'

a. SD 18 北。サヌカイト製石匙（表・裏）。



112

d. SD 27。弥生土器壺。



70



116

e. SD 27。弥生土器マダコ壺。



70'

b. SD 06。弥生土器壺。底部穿孔。



110

f. SD 27。土師器高杯。



63

c. SD 06。須恵器杯。墨書き。（実大）



11

g. SKO 1。弥生土器壺。



73



79

c. SD 07。弥生土器壺。



81



d. SD 07。弥生土器器台。

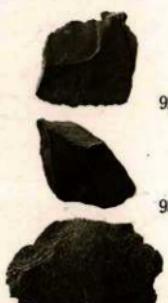


89

a. SD 07。弥生土器壺。



90



91

92

e. SD 07。弥生土器器台。サヌカイト剥片。



94



94'

b. SD 07。弥生土器マダコ壺。 f. SD 07。サヌカイト製石錐（表・裏）。（実大）



13



13'



13''



21

b. SE 03。土師器羽釜。



102



102'

c. SK 24。蓮華文軒丸瓦（表・裏）。

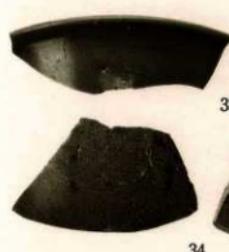


105



104

d. SK 24。平瓦。

33 36  
34 32

a. SD 05。綠釉皿。青磁碗。



53

e. SD 05。瓦質羽釜。



37

b. SD 05。瀬戸茶碗。



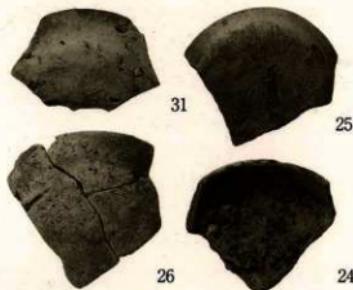
56

f. SD 05。東播臺。



55

g. SD 05。生駒西麓土器甕。

31 25  
26 24

c. SD 05。瓦器小皿。土器器小皿。



59

h. SD 05。備前すり鉢。



127

d. 整地土。土器器羽釜。



41

i. SD 05。瓦質すり鉢。



42

a. SD 05。瓦質火舍。



38

b. SD 05。瓦質火鉢。



45



45'

c. SD 05。巴文軒丸瓦（表・裏）。



44



44'

d. SD 05。唐草文軒平瓦（表・側面）。



43



43'

e. SD 05。連珠文軒平瓦（表・側面）。



47



46

c. SD 05。平瓦。



47'

a. SD 05。鬼瓦。



60



60'

b. SD 05。滑石製石鍋（内・外面）。



61

d. SD 05。サヌカイト剥片。



62



62'

e. SD 05。石硯（表・裏）。（実大）



126

f. 包含層。転用鏡（須恵器杯蓋）。



129

a. 河道 1。弥生土器壺。



136

d. 河道 2。弥生土器壺。

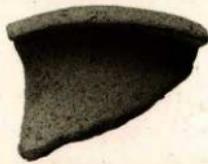


130



137

e. 河道 2。弥生土器壺。



131



135

f. 河道 2。弥生土器壺。



132

b. 河道 1。弥生土器壺。



133

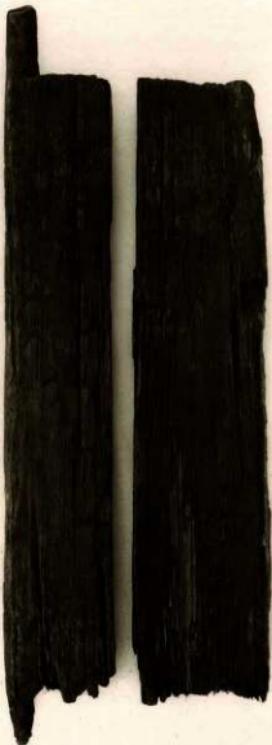
c. 河道 1。弥生土器高杯。



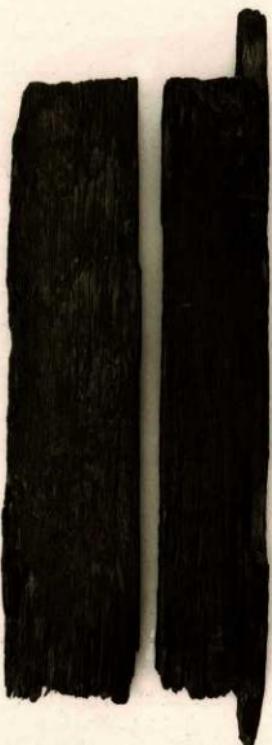
134

g. 河道 2。土師器椀 (表・裏)。

134'



138



138'



138''

a. 河道 2。木製屏。



140

a. 030溝。青磁碗。

141

a. 030溝。青磁碗。



144

145

e. 030溝。瓦質羽釜。



139

b. 030溝。青磁碗（見込）。



188

f. 030溝。瓦質臺。



139'

c. 030溝。青磁碗（外面）。



148



149



146

d. 030溝。土師質捏鉢。



150

g. 030溝。巴文軒丸瓦。



151



152



153



155



156



158



160



162



166

a. 028 井戸。瓦器椀。



179



180



181



183



184



186



185



188



189



191



192'



182



192

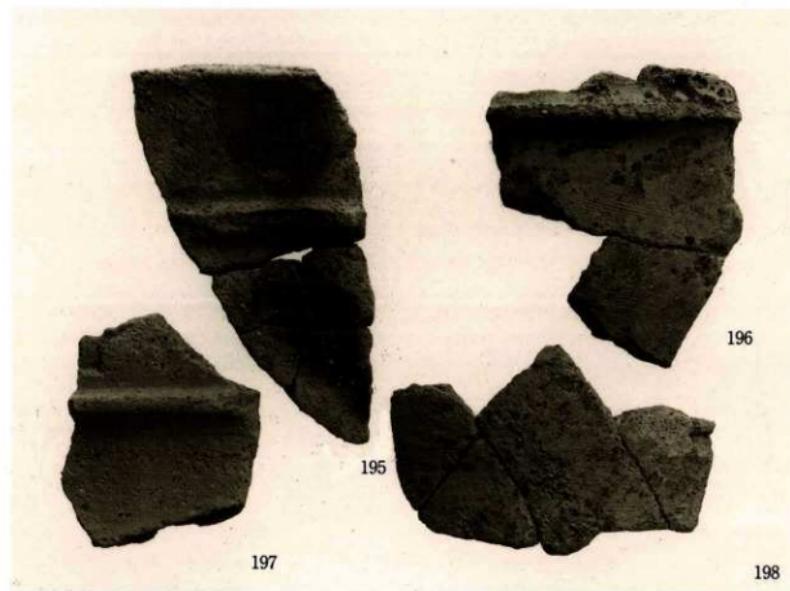
a. 028 井戸。土師器皿。白磁碗。土錘。



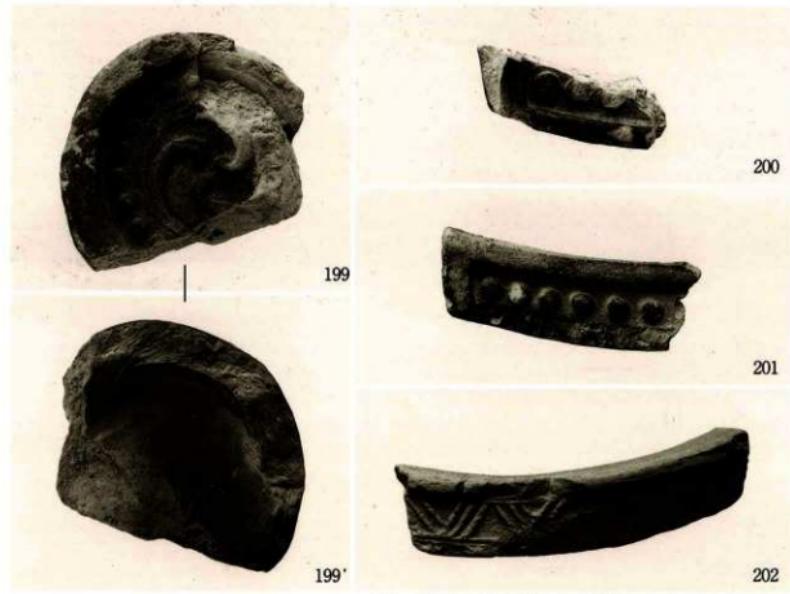
a. 034 落込み。円筒埴輪（外面）。



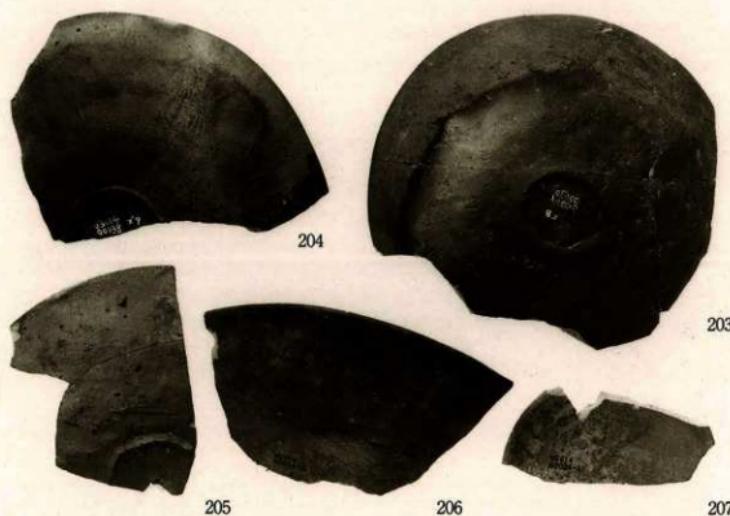
b. 同上内面。



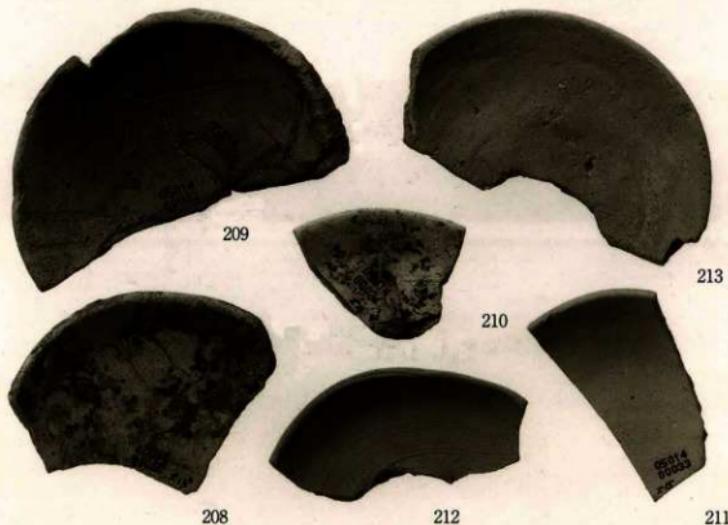
a. 034 落込み。円筒埴輪（外面）。



b. 034 落込み。巴文軒丸瓦。連珠文軒平瓦。綾杉文軒平瓦。



a. 井戸 1。瓦器碗。瓦器小皿。



b. 井戸 1。土師器小皿。



216

a. 井戸 1。土師器羽釜。



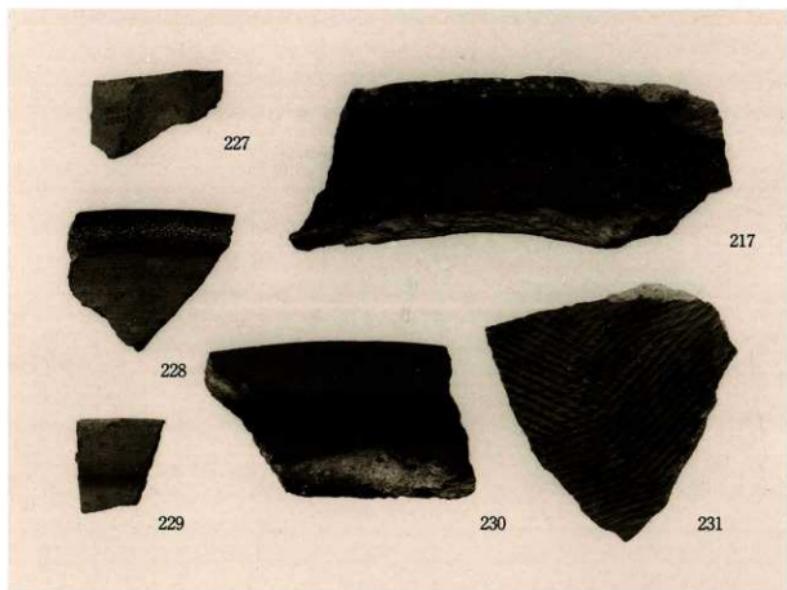
215

225

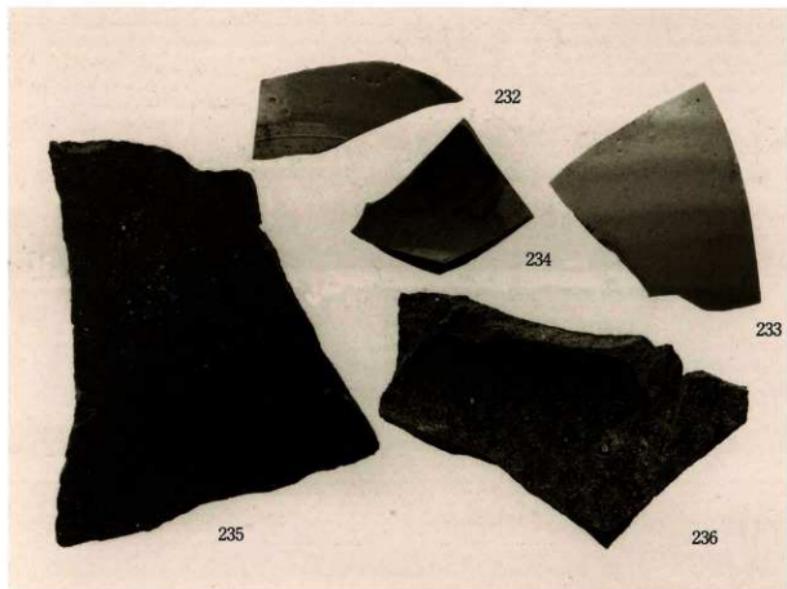
214

226

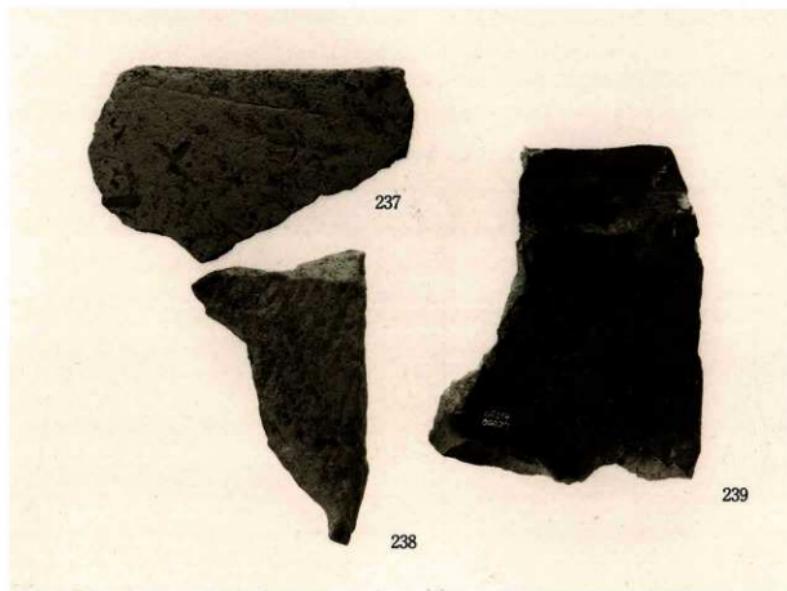
b. 井戸 1。土師器羽釜。



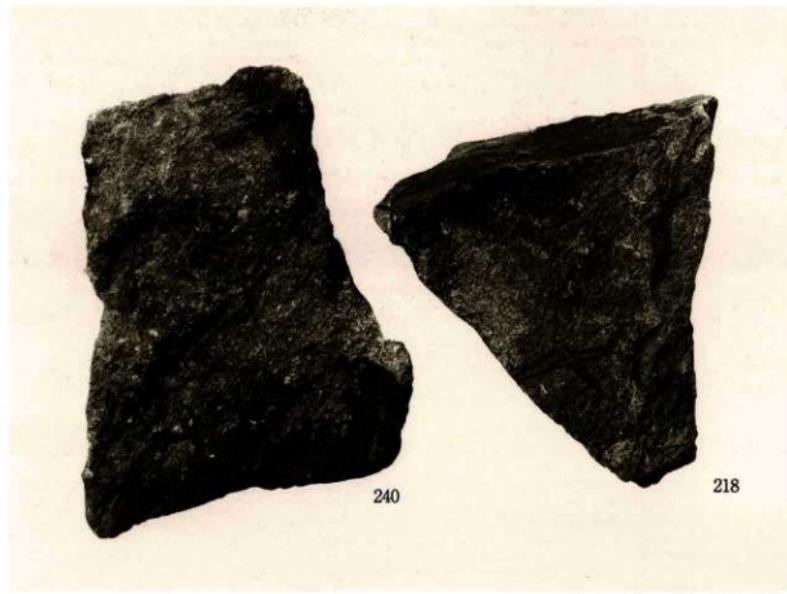
a. 井戸1。東播壺。東播ねり鉢。東播小鉢。サヌカイト剥片。



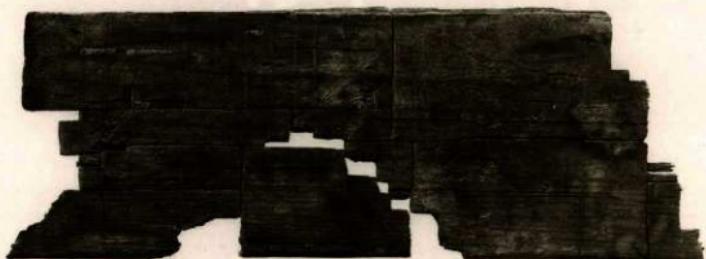
b. 井戸1。常滑壺。青磁碗。白磁碗。白磁壺。



a. 井戸 1。平瓦。



b. 井戸 1。焼石（右は紅旗片岩）。



241



219

a. 井戸 1。曲物桶。錆の柄。



220



242



243

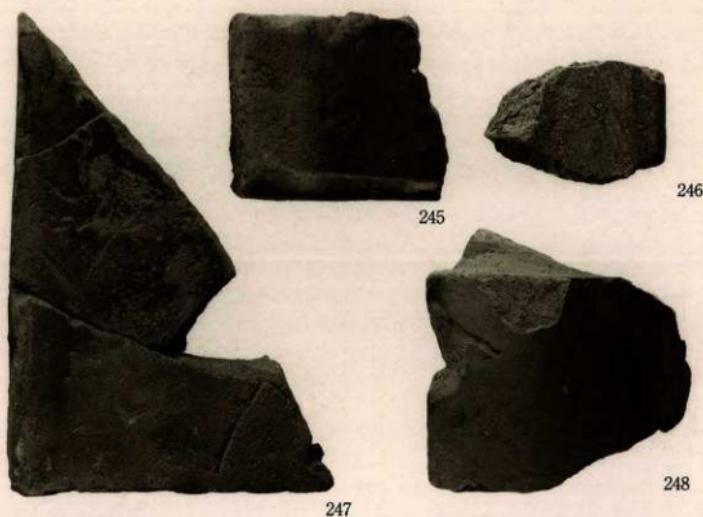


222

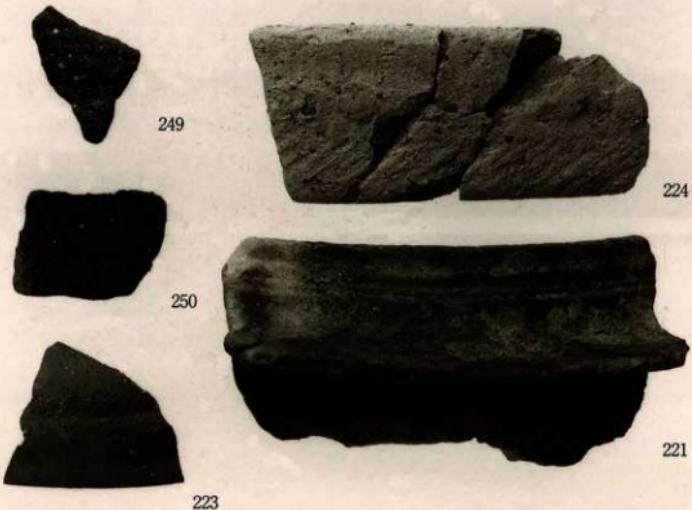


244

b. 瓦・石滌り。瓦質大甕。須恵器ねり鉢。瓦質ねり鉢。焼石。



a. 瓦・石溜り。平瓦。丸瓦。



b. 河川内。須恵器杯蓋。包含層。弥生土器壺。壺（生駒西麓）。瓦質羽釜。

# 報告書抄録

ふりがな	しもいけだいせき						
書名	下池田遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2007-9						
編著者名	西口陽一・藤澤眞依・三木弘						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 506-6941-0351 (代表)						
発行年月日	平成20年3月31日						

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	通路番号	***	***			
下池田遺跡	大阪府岸和田市 下池田町	27201	127	34° 28' 00"	135° 24' 33"	2001年7月 ～ 2005年9月	4,308	府営岸和田下池田 住宅建て替え

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下池田遺跡	集落跡	弥生時代～古 墳時代・中世	溝・土坑・井 戸・流路	弥生土器・マダコ壺・ 土師器・円筒埴輪・須 恵器・瓦器・土師器・ 瓦・曲物桶	弥生後期の木製扉、奈良時代の墨 書き恵器などが出土した。
要約				調査対象範囲は、東西300m、南北約250mの範囲。4次の調査で、合計4,300m <sup>2</sup> を調査した。弥 生時代後期の溝や流路、平安～室町時代の溝、土坑、井戸などを検出した。繩文時代の石匙や弥生 土器、中世土器、木器などが出上した。	

大阪府埋蔵文化財調査報告 2007-9

下池田遺跡

発行年月日 2008年3月31日  
編集・発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571  
大阪市中央区大手前2丁目  
TEL 06-6941-0351㈹  
印 刷 梅近畿印刷センター  
〒582-0001  
柏原市本郷5丁目6番25号

